

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成30年6月26日

【事業年度】 第133期(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

【会社名】 株式会社宮崎銀行

【英訳名】 The Miyazaki Bank , Ltd.

【代表者の役職氏名】 取締役頭取 平野 亘也

【本店の所在の場所】 宮崎県宮崎市橋通東四丁目3番5号

【電話番号】 宮崎(0985)27 3131(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役経営企画部長兼収益管理室長兼IT戦略室長 日高 啓司

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋室町四丁目6番2号 菱華ビル内
株式会社宮崎銀行 経営企画部 東京事務所

【電話番号】 東京(03)3241 5131

【事務連絡者氏名】 東京事務所長 川崎 秀行

【縦覧に供する場所】 株式会社宮崎銀行 東京支店
(東京都中央区日本橋室町四丁目6番2号)

株式会社宮崎銀行 大阪支店
(大阪市中央区瓦町三丁目1番12号)

株式会社宮崎銀行 福岡支店
(福岡市中央区渡辺通二丁目1番82号)

株式会社宮崎銀行 鹿児島営業部
(鹿児島市山之口町12番9号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

証券会員制法人福岡証券取引所
(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

(注) 東京支店、大阪支店、福岡支店及び鹿児島営業部は金融商品取引法の規定による縦覧場所ではありませんが、投資者の便宜のため縦覧に供する場所としております。

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
		(自 平成25年 4月1日 至 平成26年 3月31日)	(自 平成26年 4月1日 至 平成27年 3月31日)	(自 平成27年 4月1日 至 平成28年 3月31日)	(自 平成28年 4月1日 至 平成29年 3月31日)	(自 平成29年 4月1日 至 平成30年 3月31日)
連結経常収益	百万円	48,291	51,016	53,929	52,255	54,222
連結経常利益	百万円	10,631	12,808	15,921	12,858	12,894
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	6,876	6,238	9,804	9,255	8,770
連結包括利益	百万円	7,234	17,138	5,191	6,290	8,716
連結純資産	百万円	118,423	132,583	136,005	139,250	146,453
連結総資産	百万円	2,342,793	2,624,346	2,774,877	2,978,596	2,966,545
1株当たり純資産額	円	657.20	736.99	756.87	8,070.00	8,486.39
1株当たり当期純利益	円	40.00	36.51	57.38	539.99	509.46
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円	39.97	36.47	57.29	538.70	507.78
自己資本比率	%	4.79	4.79	4.66	4.66	4.92
連結自己資本利益率	%	6.16	5.27	7.68	6.90	6.15
連結株価収益率	倍	7.84	12.51	4.77	6.35	6.48
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	75,864	138,011	78,230	135,360	109,994
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	47,832	79,505	5,193	7,475	73,539
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	12,330	6,291	13,808	3,077	1,560
現金及び現金同等物の 期末残高	百万円	65,536	117,754	176,977	301,783	263,766
従業員数 〔外、平均臨時従業員数〕	人	1,640 〔385〕	1,617 〔400〕	1,612 〔411〕	1,594 〔420〕	1,604 〔423〕

- (注) 1 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益、潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、平成28年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。
3 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末新株予約権 - 期末非支配株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
4 平均臨時従業員数は、銀行の所定労働時間に換算し算出しております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第129期	第130期	第131期	第132期	第133期
決算年月		平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
経常収益	百万円	42,089	44,750	47,791	45,888	48,416
経常利益	百万円	9,687	11,930	15,305	12,385	13,349
当期純利益	百万円	6,831	6,187	9,736	9,432	9,410
資本金	百万円	14,697	14,697	14,697	14,697	14,697
発行済株式総数	千株	176,334	176,334	176,334	176,334	17,633
純資産	百万円	114,238	128,091	133,039	137,990	145,550
総資産	百万円	2,331,562	2,614,198	2,764,524	2,971,536	2,956,337
預金残高	百万円	1,932,501	2,042,631	2,144,878	2,227,344	2,359,152
貸出金残高	百万円	1,549,064	1,667,549	1,767,923	1,846,852	1,934,671
有価証券残高	百万円	678,814	776,314	771,533	769,682	688,882
1株当たり純資産額	円	668.61	749.46	778.12	8,007.22	8,445.03
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	円 (円)	7.00 (3.00)	8.00 (3.50)	9.00 (4.00)	9.00 (4.50)	49.50 (4.50)
1株当たり当期純利益	円	39.74	36.22	56.98	550.33	546.63
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円	39.71	36.17	56.89	549.01	544.83
自己資本比率	%	4.89	4.89	4.80	4.63	4.91
自己資本利益率	%	6.08	5.14	7.46	6.96	6.64
株価収益率	倍	7.90	12.61	4.80	6.23	6.04
配当性向	%	17.61	22.08	15.79	16.35	16.46
従業員数 〔外、平均臨時従業員数〕	人	1,464 〔367〕	1,453 〔381〕	1,446 〔397〕	1,432 〔405〕	1,436 〔405〕

- (注) 1 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。これにより発行済株式総数は158,700千株減少し、17,633千株となっております。
3 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益、潜在株式調整後1株当たり当期純利益及び配当性向は、第132期(平成29年3月)の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。
4 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。第133期(平成30年3月)の1株当たり配当額49.50円は、中間配当額4.50円と期末配当額45.00円の合計であり、中間配当額4.50円は株式併合前の配当額、期末配当額45.00円は株式併合後の配当額であります。
5 第133期(平成30年3月)中間配当についての取締役会決議は平成29年11月10日に行いました。
6 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末新株予約権)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
7 平均臨時従業員数は、銀行の所定労働時間に換算し算出しております。

2 【沿革】

昭和7年7月	昭和7年7月27日 宮崎県1,550千円、株式会社日向中央銀行および株式会社宮崎銀行の現物出資410千円、その他5名の設立発起人40千円の出資により資本金2,000千円をもって設立、商号を株式会社日向興業銀行と称しました。
昭和7年8月	営業開始(8月2日)
昭和8年12月	延岡銀行を合併
昭和18年8月	貯蓄銀行業務兼営 日向貯蓄銀行を合併
昭和28年1月	外国為替取扱開始
昭和37年8月	行名を「宮崎銀行」に改称
昭和46年8月	新本店落成
昭和48年1月	預金オンライン開始
昭和48年3月	宮崎住宅ローン株式会社(現 宮銀保証株式会社)設立(現 連結子会社)
昭和50年10月	福岡証券取引所に株式上場
昭和51年10月	南九州総合リース株式会社(現 宮銀リース株式会社)設立(現 連結子会社)
昭和54年11月	宮銀ビルサービス株式会社 設立(平成23年4月 解散) 宮銀ビジネスサービス株式会社 設立(現 連結子会社)
昭和57年5月	事務センター竣工
昭和57年10月	新総合オンラインシステム MACS 稼動開始
昭和60年6月	債券ディーリング業務開始
昭和61年4月	外国為替コルレス業務開始
昭和61年10月	株式 東京証券取引所市場第二部に上場 株式 大阪証券取引所市場第二部に上場
昭和63年4月	宮銀コンピューターサービス株式会社 設立(現 連結子会社)
昭和63年9月	株式 東京証券取引所市場第一部に指定替 株式 大阪証券取引所市場第一部に指定替(平成17年3月 上場廃止)
平成元年1月	外国為替コルレス契約包括承認を取得
平成元年3月	宮銀スタッフサービス株式会社 設立(平成23年4月 解散)
平成元年6月	金融先物取引業務開始(平成11年6月 業務廃止)
平成3年7月	担保附社債信託業務開始
平成6年1月	信託代理店業務開始
平成8年4月	宮銀ベンチャーキャピタル株式会社 設立(現 連結子会社)
平成9年1月	香港駐在員事務所開設(平成14年9月 廃止)
平成10年12月	証券投資信託業務開始
平成13年1月	新総合オンラインシステム稼動開始
平成13年4月	損害保険商品の窓口販売開始
平成13年6月	ネットバンキングサービス開始
平成14年5月	確定拠出年金業務開始
平成14年10月	個人年金保険の窓口販売開始
平成15年12月	宮銀カード株式会社 設立(現 連結子会社)
平成17年4月	証券仲介業務開始
平成20年5月	本店別館開設
平成23年1月	じゅうだん会共同版システム稼動開始
平成23年4月	宮銀ビルサービス株式会社、宮銀ビジネスサービス株式会社および宮銀スタッフサービス株式会社合併(存続会社 宮銀ビジネスサービス株式会社)

3 【事業の内容】

当行グループ（当行および連結子会社6社）は、銀行業務を中心に、リース業務、信用保証業務およびクレジットカード業務等の金融サービスに係る業務を行っております。

当行グループの事業に係わる位置づけは次のとおりであります。なお、事業の区分は「第5 経理の状況 1(1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

（銀行業）

当行の本店ほか支店72カ店等においては、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務およびその他付随業務を行っております。

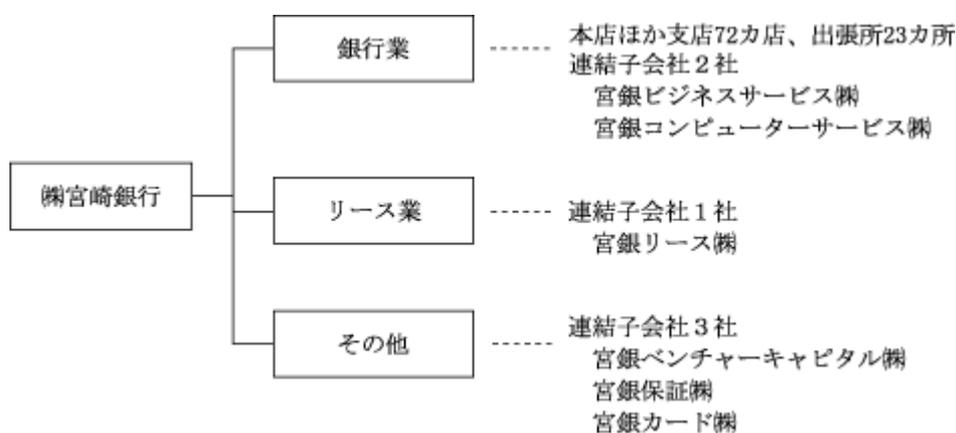
（リース業）

連結子会社の宮銀リース株式会社においては、総合リース業務を行っております。

（その他）

連結子会社の宮銀ベンチャーキャピタル株式会社においては株式・社債等への投資業務および経営コンサルティング業務を、宮銀保証株式会社においては住宅ローン等の信用保証業務を、宮銀カード株式会社においてはクレジットカード業務等を行っております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



なお、連結子会社のうち、証券市場に株式を上場または公開している会社はありません。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有(又は 被所有) 割合(%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(連結子会社) 宮銀ビジネス サービス 株式会社	宮崎県 宮崎市	10	銀行業 (事務受託)	100.00	(2) 4		預金取引	提出会社より 建物の一部賃借	
宮銀コンピュー ターサービ ス株式会社	宮崎県 宮崎市	10	銀行業 (事務受託)	100.00	(1) 4		金銭貸借 預金取引	提出会社より 建物の一部賃借	
宮銀リース 株式会社	宮崎県 宮崎市	50	リース業	94.11	(1) 4		金銭貸借 預金取引 リース 取引	提出会社より 建物の一部賃借	
宮銀ベンチャ ーキャピタル 株式会社	宮崎県 宮崎市	10	その他 (投資業)	100.00	(2) 4		預金取引	提出会社より 建物の一部賃借	
宮銀保証 株式会社	宮崎県 宮崎市	20	その他 (信用 保証業)	100.00	(2) 4		預金取引 保証取引	提出会社より 建物の一部賃借	
宮銀カード 株式会社	宮崎県 宮崎市	80	その他 (クレジット カード業)	100.00	(0) 3		金銭貸借 預金取引		

- (注) 1 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。
2 上記連結子会社は、特定子会社に該当しません。
3 上記連結子会社のうち、有価証券報告書(又は有価証券届出書)を提出している会社はありません。
4 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。
5 宮銀リース(株)につきましては、連結経常収益に占める経常収益(連結会社相互間の内部経常収益を除く。)の割合が100分の10を超えておりますが、セグメントの経常収益に占める経常収益(セグメント間の内部経常収益又は振替高を含む。)の割合が100分の90を超えているため、主要な損益情報等の記載を省略しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

平成30年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業	リース業	その他	合計
従業員数(人)	1,543 〔413〕	29 〔4〕	32 〔6〕	1,604 〔423〕

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員592人を含んでおりません。
2 臨時従業員数は、〔 〕内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
3 臨時従業員数は、銀行の所定労働時間に換算し算出しております。

(2) 当行の従業員数

平成30年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,436 〔405〕	38.3	15.3	6,041

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員564人を含んでおりません。
2 当行の従業員はすべて銀行業のセグメントに属しております。
3 臨時従業員数は、〔 〕内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
4 臨時従業員数は、銀行の所定労働時間に換算し算出しております。
5 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
6 当行の従業員組合は、宮崎銀行従業員組合と称し、組合員数は1,052人です。労使間においては特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

(会社の経営の基本方針)

当行は、経営理念を以下のとおり定め、「郷土と共にある地方銀行」の経営姿勢を堅持するとともに、地域社会の要請に積極的に対応していくことを基本方針として、経営の健全性と透明性を高め、高度化、多様化する皆さまのニーズに的確に対応する地域のリーディングバンクに相応しい経営体質の構築に取り組んでおります。

経営理念

「地域の明日を考える」

豊かな明日に向かって、地域のみなさまと共に繁栄することを目指します。

「健全な歩みで信頼に応える」

信頼される金融機関として、人と組織を生かし、健全充実経営を目指します。

「誇りと自信をもって未来に挑戦する」

時代の変化に適切に応えるため、英知と気力を結集し、挑戦し続ける風土を目指します。

(中期経営計画)

当行を取り巻く経営環境は、人口減少・少子高齢化の加速による将来的な経済基盤の縮小、金融環境・規制環境のダイナミックな変化など、一層厳しさを増していくことが予想されます。

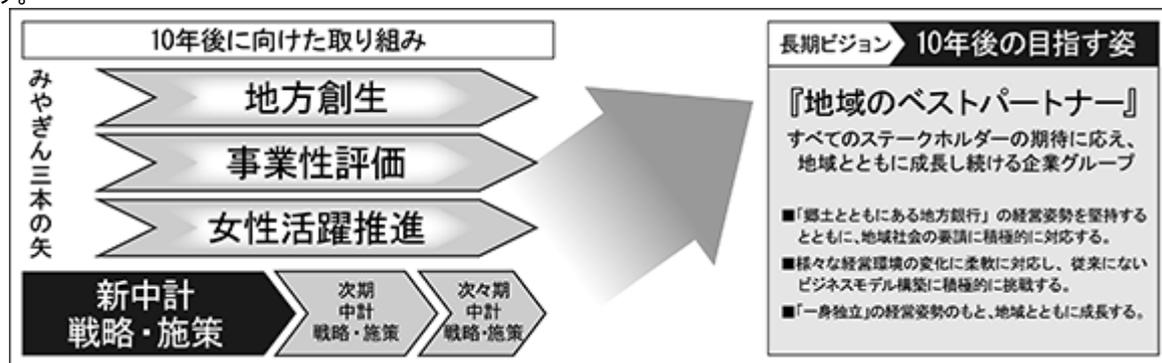
こうした厳しい環境の中、中期経営計画は、当行グループが地域とともに成長し続けることを目的とした長期ビジョンを掲げ、その実現に向けて取り組む3年間の計画としております。

目標とする経営指標

経営指標		平成31年度
収益性	経常利益	100億円
	ROE (当期純利益÷自己資本)	5%
効率性	OHR (経費÷コア業務粗利益)	69%
健全性	自己資本比率	9%
成長性	総預り資産残高 (総預金残高+預り資産残高)	3兆円
	総貸出金残高	2兆円

長期ビジョン

当行は、すべてのステークホルダーの期待に応え、地域とともに成長し続ける企業グループを目指してまいります。



中期経営計画の名称

『お客さま成長力 No.1銀行』

お客さま本位の考えを前面に打ち出し、「地域のお客さまの成長をサポートする銀行として宮崎銀行がNo.1である」とお客さまに評価いただくことを目標としたタイトルです。

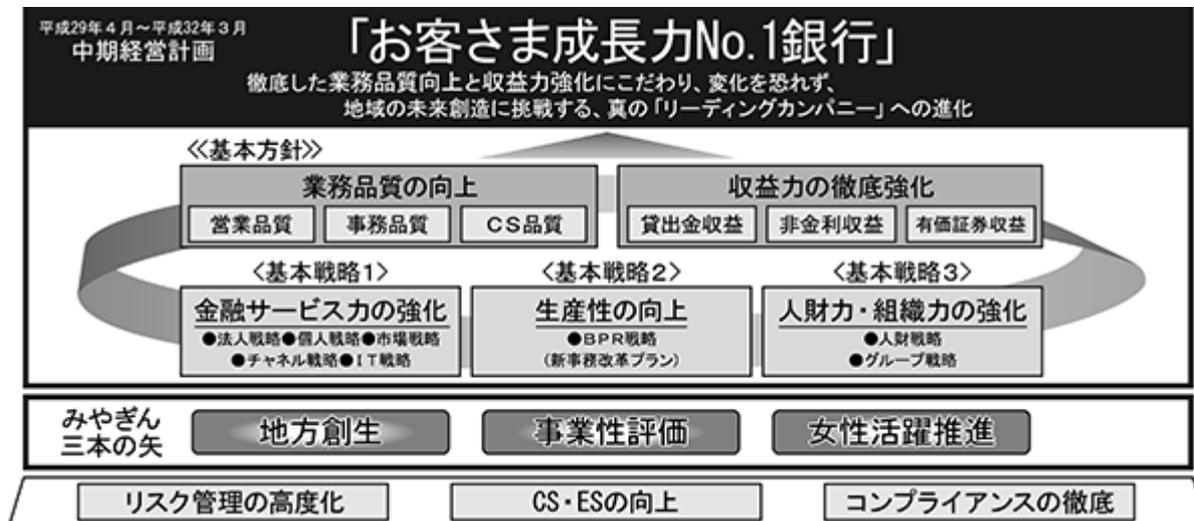
基本方針

徹底した業務品質の向上と収益力の強化にこだわり、変化を恐れず、地域の未来創造に挑戦する、真の「リーディングカンパニー」への進化。

期間

平成29年4月1日 ~ 平成32年3月31日（3年間）

コンセプト図

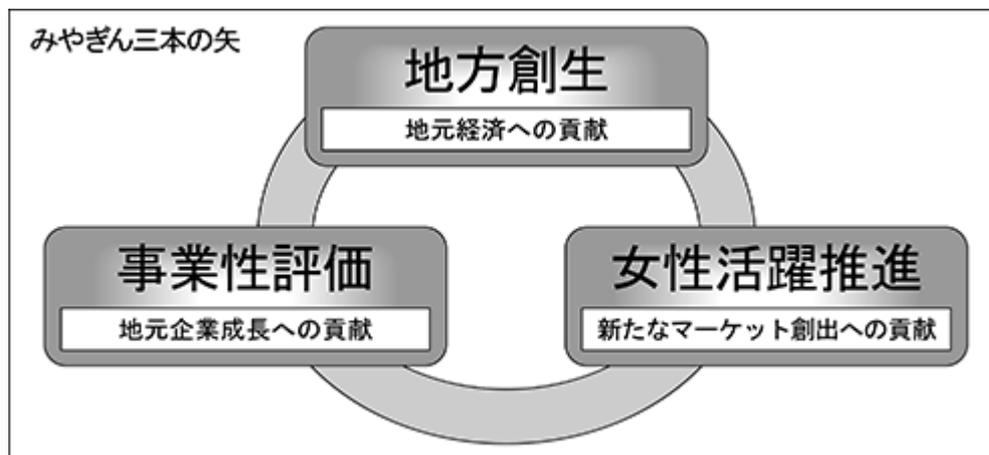


みやぎん三本の矢

当行は、「地方創生」、「事業性評価」、「女性活躍推進」を中長期的な重点施策『みやぎん三本の矢』として強力に推進してまいります。

人口減少や少子高齢化が進み、長期的に衰退が懸念される地方経済を再生・創生していくためには、「事業性評価」を通じた成長・再生支援による地元企業の成長と、「女性活躍」による新たなマーケット創出や労働人口の確保が不可欠であり、その継続した取り組みが「地方創生」の実現につながるとの考えです。

「地方創生」については、自治体、地元大学、異業種企業との連携協力を密にし、中長期的に取り組む方針です。



国内経済は緩やかな回復基調が継続し、地域経済においても、誘致企業による大型工場の新設や大型商業施設の増床、畜産を中心とした農業など全体として良好な状態を維持しています。一方で、人手不足感が強まっており、今後の状況を楽観できる状態にはありません。

また、当行が置かれた経営環境は、人口減少による人手不足や企業の後継者不足等の中長期的な課題に加え、他金融機関との競争やFinTech企業の台頭、マイナス金利政策の継続など、厳しさを増してきております。

このような環境のもと、当行が10年後も「地域のベストパートナー」としてすべてのステークホルダーの期待に応え、地域とともに成長し続けるため、中期経営計画「お客さま成長力 No. 1 銀行」（平成29年4月～平成32年3月）をスタートさせました。徹底した「業務品質の向上」と「収益力の強化」を基本方針とし、「みやぎん三本の矢」を中長期重点施策として地域経済の発展に資する取り組みを実施しております。

女性や若者への投資、地元企業の海外進出やIT化支援等、金融仲介機能を発揮して地域の課題を解決することで、地域のお客さまの成長をサポートする銀行としてNo. 1であると評価いただけるよう、全力で取り組んでまいります。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループが判断したものであります。

1. 信用リスク

当行は、従来から資産の健全性を追求し、不良債権の圧縮に努めております。しかし、宮崎県内の景気動向により、当行の融資先の経営状況が変動したり、不動産価格や株価の変動によって当行に提供していただいている担保の価値も変動いたします。

当行は、融資先の状況や提供していただいている担保の価値等を勘案して貸倒引当金を計上し、また、債権の売却等も行っております。よって、これらの変動が著しく悪化方向に振れた場合、当行の不良債権が増加するおそれがあり、また、想定外に多額の貸倒引当や償却が発生するおそれがあります。特に、当行は宮崎県内を営業基盤としており、貸出金の8割超が宮崎県内等地元向けとなっています。万一、大規模な地震や台風等の自然災害等が発生した場合、融資先の経営状況が悪化し、貸出資産が劣化するおそれがあります。その結果、当行の業績に悪影響を及ぼし、当行の財務内容を弱くし、自己資本の減少につながる可能性があります。

2. 市場リスク(有価証券運用)

当行は、デリバティブを含む債券や株式等の有価証券投資活動を行っております。従って、当行の業績および財政状態は、かかる活動に伴うリスクにさらされております。特に、金利、株価および為替レートの変動等が挙げられます。

例えば、金利が上昇した場合は、保有する国債等の債券に、株価が下落した場合は、保有する株式に悪影響を及ぼします。

結果として、当行の業績に悪影響を与えるとともに、自己資本比率の低下を招くおそれがあります。また、円高となった場合は、当行の外貨建投資の財務諸表上の価値が減少します。

3. 預貸金の金利変動に伴うリスク

当行の預金金利、貸出金利は市場金利に基づき改定しております。市場金利の変化の速度や度合いによっては、預金金利、貸出金利改定のタイムラグや当行の資産(貸出等)・負債(預金等)の各科目の市場金利に対する金利感応度(弾性値)の差異等により資金利益が悪化する可能性があります。

4. 流動性リスク

当行の財務内容の悪化等により必要な資金が確保できなくなったり、資金の確保に通常よりも著しく高い金利での資金調達を余儀なくされる可能性があります。また、市場の混乱等により市場において取引が出来なかったり、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされることにより損失を被る可能性があります。

5. オペレーショナル・リスク

オペレーショナル・リスクとして以下の事項を想定しております。

(1) 事務リスク

当行は、事務の効率化、事務規程等の整備を進めるとともに、研修などにより事務の堅確性向上を図っておりますが、故意または過失等による事務ミスにより事故が発生し、損失を被る可能性があります。

(2) システムリスク

当行は、セキュリティ、システム、データ、ネットワーク等の管理担当者を置くとともに、システム開発部門とシステム運用部門は原則的に分離し、相互牽制体制をとるなど安全対策に万全を期しておりますが、内部または外部要因による障害等により損失を被る可能性があります。

(3) 情報セキュリティ・リスク

当行は、金融分野における個人情報保護に関するガイドラインの安全管理措置等についての実務指針などに沿って情報漏洩対策を十分に施していますが、万一、顧客情報等漏洩事故が発生した場合は、個人情報保護法違反をはじめ、顧客に不利益を与えたり、その他の犯罪と繋がり膨大な損害賠償義務が発生するなど、当行の経営や信用に深刻な影響を与える可能性があります。

また、当行関係先(取引先、株主、役職員など)または当行自身に関する情報資産の厳格な管理に努めておりますが、万一、当該情報の漏洩、紛失、改ざん、不正利用等が発生し、当行の信用低下等が生じた場合、当行の業績、財務内容に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 法務リスク

当行は、法令等遵守の徹底や法的チェックを厳格に実施することにより法的リスクの軽減に努めておりますが、法令解釈の相違、法的手続の不備、法令等に違反する行為などの法的原因により、損失の発生につながる可能性があります。

また、保険業務や証券業務等に関する適合性原則や商品説明等について十分な教育・研修を行っておりますが、万一、顧客への対応が疎かになった場合、訴訟を受け損害賠償の支払を命じられたり、信用を失墜させる事態に陥るリスクがあります。

(5) 人的リスク

当行は各種教育研修や勉強会を実施することにより人的リスクの発生防止に努めておりますが、人事運営上の不公平・不公正（報酬・手当・解雇等の問題）や差別的行為（セクシャルハラスメント等）などにより損失が発生する可能性があります。

(6) 有形資産リスク

当行は地震・台風等に備え、建物耐震化や風水害対策に努めておりますが、自然災害やその他の事象により、本店、事務センター、営業店の土地・建物や什器・備品等に損害が発生する可能性があります。

(7) 風評等による預金流出リスク

当行は健全経営を堅持しておりますが、万が一何らかの要因により、当行の経営が不安視され風評等が発生すると、預金が流出し、資金繰りに支障をきたす可能性があります。

6. その他のリスク

(1) 自己資本比率

自己資本比率が悪化するリスク

当行は、連結自己資本比率および単体自己資本比率を「銀行法第14条の2の規定に基づき自己資本比率の基準を定める件」に定められた国内基準(4%)以上に維持しなければなりません。

当行の自己資本比率が要求される水準を下回った場合には、早期是正措置により、業務の全部または一部の停止等を含む様々な命令を受けることとなります。当行の自己資本比率に影響を与える要因には以下のものが含まれます。

- ・不良債権の処分に際して生じ得る与信関係費用の増加
- ・債務者の信用力の悪化に際して生じ得る与信関係費用の増加
- ・有価証券ポートフォリオの価値の低下
- ・自己資本比率の基準および算定方法の変更
- ・本項記載のその他の不利益な展開

繰延税金資産

現時点の会計基準では、ある一定の状況において、実現すると見込まれる税務上の便益を繰延税金資産として計上することが認められています。また、現時点の自己資本比率規制においては、繰延税金資産全額が自己資本の額に含まれております。

繰延税金資産の計算は、将来の課税所得など様々な予測・仮定に基づいており、実際の結果がかかる予測・仮定とは異なる可能性があります。従って、当行が、将来の課税所得の予測・仮定に基づいて繰延税金資産の一部又は全部の回収ができないと判断した場合、当行の繰延税金資産は減額され、その結果、当行の業績に悪影響を与えるとともに、自己資本比率の低下を招くこととなります。

(2) 年金債務

当行の年金資産の運用利回り低下による資産の積立不足や資産価値の下落により損失が発生し、その結果、当行の年金給付費用が増加する可能性があります。

また、新規加入員数の変動など債務計算の前提となる基礎率と実績値の乖離により損失が発生する可能性があります。

(3) 当行の格付低下

格付機関が当行の格付を引き下げた場合、市場資金取引等において不利な条件を承諾せざるを得なくなった、または、一定の取引を行うことができなくなるおそれがあり、当行の資本・資金調達に悪影響を及ぼす可能性があります。

その場合は、結果として当行の業績および財政状態にも悪影響を与えることとなります。

(4) ビジネス戦略<当行のビジネス戦略が奏功しないリスク>

当行は、収益力増強のために様々なビジネス戦略を実施しておりますが、以下に述べるものをはじめとする様々な要因が生じた場合には、これらの戦略が功を奏しないか、当初予想していた結果をもたらさない可能性があります。

- ・優良取引先（含む個人）への貸出金増強が進まないこと
- ・既存貸出についての利鞘拡大（金利適正化等）が進まないこと
- ・競争状況または市場環境により手数料収入が期待通りに増加しないこと
- ・経費節減等、効率化を図る戦略が期待通りに進まないこと
- ・システムコスト（含む共同化）が予想以上に高額になること

(5) 競争激化・業務範囲の拡大

当行は宮崎県を営業基盤にしておりますが、金融制度の規制緩和の進展やゆうちょ銀行による個人融資業務への進出や投資信託業務拡大およびメガバンク等の県内営業強化等により、当行の競争優位が脅かされ、結果として、業績および財政状態に悪影響を及ぼすおそれがあります。また、本来の銀行業務に加え、保険業務や証券業務等に業務範囲を拡大中であることからそれらの業務に対し十分な適応ができず、顧客から訴訟を受けたり、信用を失墜させる事態に陥るリスクがあります。

(6) 感染症による業務継続リスク

新型インフルエンザ等の感染症による世界的大流行発生のため当行業務に支障をきたし、業務の全部または一部の継続が困難となり、当行の業績および財政状態に悪影響が及ぶおそれがあります。

(7) 自然災害による業務継続リスク

温暖化により近年大型化している台風の直撃、霧島山系火山の噴火、日向灘沖を震源として発生する地震等の自然災害により、業務の全部または一部の継続が困難となり、当行の業績および財政状態に悪影響が及ぶおそれがあります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度の国内経済は、個人消費や生産、雇用・所得環境の改善を背景に、全体として緩やかな回復が継続しました。米国・東アジアにて緩やかに景気が回復していることに加え、米国での大型減税政策による個人消費、設備投資の拡大期待もあり、輸出および企業収益が改善しました。今後、雇用・所得環境の改善が継続するなか、個人消費を中心とした持ち直しの動きの拡大が期待されます。

金融面では、日経平均株価は好調な企業業績を背景に平成30年1月に2万4千円まで上昇しましたが、2月以降、米国での株価急落を受けて大きく下落する場面があり、当年度末は2万1千円台となりました。長期金利の指標となる新発10年物国債利回りは、マイナス金利政策のもと、概ね0.1%を下回る水準となりました。

県内経済は、雇用環境の改善が続くなか、個人消費を中心に緩やかな回復が継続しました。生産および住宅投資は弱い動きとなっているものの、観光は平成28年4月に発生した熊本地震からの反動もあり、宿泊客数・主要観光施設入場者数ともに前年を大きく上回るなど、改善傾向にあります。

このような経済環境のもと、当行グループは、引き続き地域に密着した営業展開と経営内容の充実に努めました結果、当連結会計年度における当行グループの財政状態、経営成績およびキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は以下のとおりとなりました。

財政状態

当連結会計年度末における貸出金残高は、個人貸出、法人貸出が増加したことから、前連結会計年度末に比べ884億円増加して1兆9,301億円となりました。

当連結会計年度末における有価証券残高は、前連結会計年度末に比べ807億円減少して6,853億円となりました。

当連結会計年度末における投資信託の預り残高は、前連結会計年度末に比べ49億円減少して445億円となり、国債等公共債の預り残高は、同51億円減少して296億円となりました。当連結会計年度における保険の販売額は280億円と順調に増加し、当連結会計年度末までの販売額累計は3,010億円となりました。

当連結会計年度末における預金（譲渡性預金を含む）残高は、個人預金、法人預金が増加したことから、前連結会計年度末に比べ934億円増加して2兆4,872億円となりました。

経営成績

経常収益は、貸出金利息や有価証券利息配当金の増加により資金運用収益が増加したこと、預り資産手数料やソリューション手数料の増加により役務取引等収益が増加したこと、国債等債券売却益の増加によりその他業務収益が増加したこと、ならびに株式等売却益の増加によりその他経常収益が増加したことから、前連結会計年度に比べ1,967百万円増加して54,222百万円となりました。

経常費用は、資金調達費用や営業経費が減少したものの、支払ローン関係手数料の増加により役務取引等費用が増加したこと、および国債等債券売却損の増加によりその他業務費用が増加したことから、前連結会計年度に比べ1,931百万円増加して41,328百万円となりました。

この結果、経常利益は、前連結会計年度に比べ36百万円増加して12,894百万円となり、親会社株主に帰属する当期純利益は、同485百万円減少して8,770百万円となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

() 銀行業（銀行業務）

経常収益は、貸出金利息や有価証券利息配当金の増加により資金運用収益が増加したこと、預り資産手数料やソリューション手数料の増加により役務取引等収益が増加したこと、国債等債券売却益の増加によりその他業務収益が増加したこと、ならびに株式等売却益の増加によりその他経常収益が増加したことから、前連結会計年度に比べ2,503百万円増加して48,809百万円となりました。経常費用は、資金調達費用や営業経費が減少したものの、支払ローン関係手数料の増加により役務取引等費用が増加したこと、および国債等債券売却損の増加によりその他業務費用が増加したことから、前連結会計年度に比べ1,535百万円増加して35,342百万円となりました。この結果、経常利益は、前連結会計年度に比べ967百万円増加して13,466百万円となりました。

()リース業(リース業務)

経常収益は、リース料収入が増加したことなどから、前連結会計年度に比べ374百万円増加して6,288百万円となりました。経常費用は、仕入原価が増加したことなどから、前連結会計年度に比べ377百万円増加して5,978百万円となりました。この結果、経常利益は、前連結会計年度に比べ3百万円減少して310百万円となりました。

()その他(信用保証業務等)

経常収益は、保証料が減少したことなどから、前連結会計年度に比べ126百万円減少して488百万円となりました。経常費用は、前連結会計年度に比べほぼ横這いの567百万円となりました。この結果、経常損益は、前連結会計年度に比べ127百万円減少して78百万円の損失となりました。

キャッシュ・フロー

現金及び現金同等物の当連結会計年度末残高は、前連結会計年度末に比べ38,016百万円減少して263,766百万円となりました。

営業活動によるキャッシュ・フローは、貸出金増加およびコールマネーの減少等により、前連結会計年度に比べ245,354百万円減少して109,994百万円のマイナスとなりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の売却および償還による収入が増加したことから、前連結会計年度に比べ81,014百万円増加して73,539百万円のプラスとなりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度に比べ1,517百万円増加して1,560百万円のマイナスとなりました。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当行グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において判断したものであります。

経営成績の分析

() 主な収支（連結損益計算書）

資金利益は、貸出金利息および有価証券利息配当金の増加等により資金運用収益が増加したことに加え、預金利息の減少等により資金調達費用が減少したことから、前連結会計年度に比べ304百万円増加して32,419百万円となりました。

役務取引等利益は、支払ローン関係手数料の増加等により役務取引等費用が増加しましたが、受入機能提供手数料の増加等による役務取引等収益の増加がこれを上回ったことから、前連結会計年度に比べ77百万円増加して3,855百万円となりました。

その他業務利益は、債券関係損益が減少したことから、前連結会計年度に比べ1,021百万円減少して33百万円となりました。

以上により、連結粗利益は、前連結会計年度に比べ639百万円減少して36,308百万円となりました。

経常利益は、連結粗利益が減少しましたが、営業経費の減少や株式等関係損益の増加により、前連結会計年度に比べ36百万円増加して12,894百万円となりました。親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度に比べ485百万円減少して8,770百万円となりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
資金利益	32,115	32,419	304
うち資金運用収益	33,834	34,135	301
うち資金調達費用	1,718	1,715	3
役務取引等利益	3,778	3,855	77
うち役務取引等収益	8,002	8,190	188
うち役務取引等費用	4,224	4,334	110
その他業務利益	1,054	33	1,021
うちその他業務収益	7,504	8,486	982
うちその他業務費用	6,450	8,452	2,002
連結粗利益(= + +)	36,947	36,308	639
営業経費	26,306	26,076	230
その他経常損益	2,217	2,661	444
うち株式等関係損益	1,179	2,058	879
うち貸倒償却引当費用	302	340	38
うち貸倒引当金戻入益	602	31	571
経常利益(= - +)	12,858	12,894	36
特別損益	210	176	34
税金等調整前当期純利益	12,648	12,717	69
法人税、住民税及び事業税	4,365	4,103	262
法人税等調整額	451	168	283
非支配株主に帰属する当期純利益 又は非支配株主に帰属する当期純損失()	521	12	533
親会社株主に帰属する当期純利益	9,255	8,770	485
(注) 貸倒償却引当費用 = 貸出金償却 + 一般貸倒引当金繰入額 + 個別貸倒引当金繰入額 + 偶発損失引当金繰入額 + バルクセール売却損 + その他			
連結業務純益	11,818	11,331	487
連結業務純益(一般貸倒引当金繰入前)	11,818	11,331	487
(注) 連結業務純益 = 単体業務純益 + 子会社経常利益 - 内部取引			

()貸倒償却引当費用

貸倒償却引当費用は、前連結会計年度に比べ38百万円増加して340百万円となりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
貸倒償却引当費用	302	340	38
うち貸出金償却	216	313	97
うち一般貸倒引当金繰入額			
うち個別貸倒引当金繰入額			
うち偶発損失引当金繰入額	32	6	38
うちバルクセール等売却損	39	3	42
その他	79	24	55

()債券関係損益

債券関係損益は、売却損の増加により、前連結会計年度に比べ950百万円減少して1,174百万円のマイナスとなりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
債券関係損益	224	1,174	950
うち国債等債券売却益	968	1,585	617
うち国債等債券売却損	1,039	2,218	1,179
うち国債等債券償還損	153	541	388
うち国債等債券償却			

()株式等関係損益

株式等関係損益は、売却益が増加したことから、前連結会計年度に比べ879百万円増加して2,058百万円のプラスとなりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
株式等関係損益	1,179	2,058	879
うち株式等売却益	1,387	2,318	931
うち株式等売却損	104	21	83
うち株式等償却	103	239	136

財政状態の分析

()貸出金

貸出金は、個人貸出、法人貸出が増加したことから、前連結会計年度末に比べ88,384百万円増加して1,930,172百万円となりました。

なお、個人ローン等貸出金〔単体〕は、住宅ローンの増加等により前連結会計年度末に比べ47,001百万円増加して631,174百万円となりました。

	前連結会計年度末 (百万円)(A)	当連結会計年度末 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
貸出金残高(未残)	1,841,788	1,930,172	88,384

	前事業年度末 (百万円)(A)	当事業年度末 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
貸出金残高(未残)〔単体〕	1,846,852	1,934,671	87,819
うち中小企業等貸出金	1,349,802	1,472,942	123,140
うち個人ローン等貸出金	584,173	631,174	47,001
うち住宅ローン	536,134	581,065	44,931

(金融再生法開示債権の状況)

(参考)

金融再生法開示債権および引当・保全の状況は以下のとおりであります。

金融再生法開示債権は、前連結会計年度末に比べ576百万円増加して31,822百万円となりました。

開示債権比率は、前連結会計年度末に比べ0.04ポイント低下して1.63%となりました。

債権区分別では、破産更生債権及びこれらに準ずる債権が209百万円、要管理債権が2,947百万円、それぞれ増加し、危険債権が2,581百万円減少しております。

当連結会計年度末の開示債権の保全状況は、開示債権31,822百万円に対し、引当金による保全が7,416百万円、担保保証等による保全が13,559百万円で、開示債権全体の保全率は、前連結会計年度末に比べ6.71ポイント低下して65.91%となっております。

不良債権処理に関しましては、今後とも積極的に償却・売却等による最終処理、または再生可能な先の正常化を図ることで、不良債権を削減したいと考えております。

金融再生法開示債権[連結]

	前連結会計年度末 (百万円)(A)	当連結会計年度末 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	3,286	3,495	209
危険債権	20,943	18,362	2,581
要管理債権	7,016	9,963	2,947
小計(= + +)	31,246	31,822	576
正常債権	1,829,960	1,920,190	90,230
合計(= +)	1,861,207	1,952,012	90,805
開示債権比率(= /)	1.67%	1.63%	0.04%
保全額	22,691	20,975	1,716
うち貸倒引当金	8,219	7,416	803
うち担保保証等	14,472	13,559	913
保全率(= /)	72.62%	65.91%	6.71%

()有価証券

有価証券は、地方債が増加したものの、国債や社債、その他の証券が減少したことから、前連結会計年度末に比べ80,756百万円減少して685,326百万円となりました。

	前連結会計年度末 (百万円)(A)	当連結会計年度末 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
有価証券	766,082	685,326	80,756
うち国債	301,573	249,168	52,405
うち地方債	140,399	146,795	6,396
うち短期社債			
うち社債	122,149	101,283	20,866
うち株式	53,138	53,013	125
うちその他の証券	148,821	135,065	13,756

()預金

預金等は、個人預金、法人預金が増加したことから、前連結会計年度末に比べ93,387百万円増加して2,487,208百万円となりました。

	前連結会計年度末 (百万円)(A)	当連結会計年度末 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
預金	2,224,498	2,357,240	132,742
うち流動性預金	1,436,620	1,545,309	108,689
うち定期性預金	742,500	776,499	33,999
譲渡性預金	169,322	129,968	39,354
預金等(= +)	2,393,821	2,487,208	93,387

資本の財源および資金の流動性に係る情報

当行グループの中核事業は銀行業であり、主に本店ほか支店が立地する地域のお客さまから預入いただいた預金を貸出金や有価証券で運用しております。

固定資産の取得等の資本的支出につきましては、自己資金で対応しております。

また、当行はALM委員会を通して、経営環境、資金繰り状況、流動性確保状況等を勘案した、適切な資金管理を行っております。

なお、当行グループの資金状況につきましては、「(1) 経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フロー」に記載のとおりであります。

連結自己資本比率(国内基準)

自己資本額は、利益の積み上げにより前連結会計年度末に比べ5,949百万円増加して146,193百万円となりました。

リスク・アセットは、法人貸出、個人貸出の増加等により、前連結会計年度末に比べ108,431百万円増加して1,535,653百万円となりました。

以上の結果、連結自己資本比率は、前連結会計年度末に比べ0.31ポイント低下して9.51%となりました。

	前連結会計年度末 (百万円)(A)	当連結会計年度末 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
コア資本に係る基礎項目	141,494	147,963	6,469
コア資本に係る調整項目	1,249	1,769	520
自己資本額(= -)	140,244	146,193	5,949
リスク・アセット	1,427,222	1,535,653	108,431
うち信用リスク・アセット	1,352,551	1,460,217	107,666
うちオペレーショナル・リスク相当額に係る額	74,671	75,436	765
連結自己資本比率(= /)	9.82%	9.51%	0.31%

(参考)

(1) 国内業務部門・国際業務部門別収支

資金の効率的運用等、収益の確保に努めました結果、部門別収支は次のとおりとなりました。

資金運用収益は、貸出金利息および有価証券利息配当金が増加したことから前連結会計年度に比べ301百万円増加しました。資金調達費用は、コールマネー利息が増加したものの、預金利息が減少したことから前連結会計年度に比べ2百万円減少しました。その結果、資金運用収支は、前連結会計年度に比べ303百万円増加して32,424百万円となりました。

役務取引等収益は、預り資産手数料や受入機能提供手数料が増加したことから前連結会計年度に比べ188百万円増加しました。役務取引等費用は支払ローン関係手数料が増加したことから前連結会計年度に比べ110百万円増加しました。その結果、役務取引等収支は前連結会計年度に比べ77百万円増加して3,855百万円となりました。

その他業務収支は、債券関係損益が減少したことから前連結会計年度に比べ1,021百万円減少して33百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	30,555	1,565		32,121
	当連結会計年度	31,401	1,023		32,424
うち資金運用収益	前連結会計年度	32,082	1,816	65	33,834
	当連結会計年度	32,761	1,404	30	34,135
うち資金調達費用	前連結会計年度	1,526	250	65	1,712
	当連結会計年度	1,359	380	30	1,710
役務取引等収支	前連結会計年度	3,769	9		3,778
	当連結会計年度	3,848	7		3,855
うち役務取引等収益	前連結会計年度	7,961	40		8,002
	当連結会計年度	8,148	41		8,190
うち役務取引等費用	前連結会計年度	4,192	31		4,224
	当連結会計年度	4,300	34		4,334
その他業務収支	前連結会計年度	1,126	71		1,054
	当連結会計年度	1,961	1,928		33
うちその他業務収益	前連結会計年度	6,548	956		7,504
	当連結会計年度	8,450	35		8,486
うちその他業務費用	前連結会計年度	5,422	1,027		6,450
	当連結会計年度	6,488	1,964		8,452

(注) 1 「国内業務部門」は国内店の円建取引並びに子会社の取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。

ただし、円建対非居住者取引等は、「国際業務部門」に含めております。

2 「相殺消去額()」は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借利息であります。

3 資金調達費用は、金銭の信託運用見合費用(前連結会計年度6百万円、当連結会計年度5百万円)を控除して表示しております。

(参考)

(2) 国内業務部門・国際業務部門別資金運用 / 調達の状況

国内業務部門

資金運用勘定については次のとおりとなっております。

平均残高は、有価証券が減少したものの貸出金の増加により19,894百万円増加して2,570,863百万円、利息は、貸出金利息や有価証券利息配当金の増加により685百万円増加して32,765百万円、利回りは、0.02ポイント上昇して1.27%となりました。

資金調達勘定については次のとおりとなっております。

平均残高は、預金や借入金等の増加等により152,232百万円増加して2,833,442百万円、利息は、預金等利息の減少により165百万円減少して1,361百万円、利回りは、0.01ポイント低下して0.04%となりました。

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	2,550,969	32,080	1.25
	当連結会計年度	2,570,863	32,765	1.27
うち貸出金	前連結会計年度	1,775,621	25,055	1.41
	当連結会計年度	1,863,299	25,174	1.35
うち商品有価証券	前連結会計年度	33	0	0.24
	当連結会計年度	36	0	0.07
うち有価証券	前連結会計年度	661,214	6,856	1.03
	当連結会計年度	641,924	7,463	1.16
うちコールローン及び 買入手形	前連結会計年度	4,791	0	0.00
	当連結会計年度	1,441	0	0.00
うち買入金銭債権	前連結会計年度	157	2	1.53
	当連結会計年度	113	1	1.53
うち預け金	前連結会計年度	9,251	9	0.10
	当連結会計年度	9,187	4	0.05
資金調達勘定	前連結会計年度	2,681,210	1,526	0.05
	当連結会計年度	2,833,442	1,361	0.04
うち預金	前連結会計年度	2,142,994	340	0.01
	当連結会計年度	2,258,017	269	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度	248,249	122	0.04
	当連結会計年度	235,408	63	0.02
うちコールマネー及び 売渡手形	前連結会計年度	67,054	21	0.03
	当連結会計年度	70,836	39	0.05
うち債券貸借取引受入担 保金	前連結会計年度	153,745	369	0.24
	当連結会計年度	152,886	401	0.26
うち借入金	前連結会計年度	65,739	70	0.10
	当連結会計年度	112,309	70	0.06

(注) 1 当行の平均残高は、日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、月末毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

2 「国内業務部門」は国内店の円建取引並びに子会社の取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は「国際業務部門」に含めております。

3 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度200,420百万円、当連結会計年度317,589百万円)を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度11,624百万円、当連結会計年度11,049百万円)及び利息(前連結会計年度6百万円、当連結会計年度5百万円)を、それぞれ控除して表示しております。

国際業務部門

資金運用勘定については次のとおりとなっております。

平均残高は、貸出金や有価証券の減少等により37,241百万円減少して77,417百万円、利息は、有価証券利息配当金の減少等により412百万円減少して1,404百万円、利回りは、0.23ポイント上昇して1.81%となりました。

資金調達勘定については次のとおりとなっております。

平均残高は、36,953百万円減少して77,439百万円、利息は、130百万円増加して380百万円、利回りは、0.28ポイント上昇して0.49%となりました。

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	114,658	1,816	1.58
	当連結会計年度	77,417	1,404	1.81
うち貸出金	前連結会計年度	5,301	39	0.73
	当連結会計年度	3,562	28	0.80
うち有価証券	前連結会計年度	105,150	1,768	1.68
	当連結会計年度	69,209	1,358	1.96
うちコールローン及び買入手形	前連結会計年度	715	8	1.20
	当連結会計年度	1,031	15	1.54
資金調達勘定	前連結会計年度	114,392	250	0.21
	当連結会計年度	77,439	380	0.49
うち預金	前連結会計年度	2,981	15	0.51
	当連結会計年度	4,401	34	0.79
うちコールマネー及び売渡手形	前連結会計年度	11,490	170	1.48
	当連結会計年度	18,153	315	1.73

- (注) 1 当行の国際業務部門における国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。
2 「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は「国際業務部門」に含めております。

合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺 消去額 ()	合計	小計	相殺 消去額 ()	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	2,665,628	99,899	2,565,729	33,897	65	33,831	1.31
	当連結会計年度	2,648,280	54,860	2,593,420	34,169	30	34,139	1.31
うち貸出金	前連結会計年度	1,780,923		1,780,923	25,094		25,094	1.40
	当連結会計年度	1,866,862		1,866,862	25,203		25,203	1.35
うち商品有価証券	前連結会計年度	33		33	0		0	0.24
	当連結会計年度	36		36	0		0	0.07
うち有価証券	前連結会計年度	766,365		766,365	8,624		8,624	1.12
	当連結会計年度	711,133		711,133	8,822		8,822	1.24
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	5,507		5,507	8		8	0.15
	当連結会計年度	2,472		2,472	15		15	0.64
うち買入金銭債権	前連結会計年度	157		157	2		2	1.53
	当連結会計年度	113		113	1		1	1.53
うち預け金	前連結会計年度	9,251		9,251	9		9	0.10
	当連結会計年度	9,187		9,187	4		4	0.05
資金調達勘定	前連結会計年度	2,795,603	99,899	2,695,704	1,777	65	1,712	0.06
	当連結会計年度	2,910,881	54,860	2,856,021	1,741	30	1,711	0.05
うち預金	前連結会計年度	2,145,976		2,145,976	355		355	0.01
	当連結会計年度	2,262,418		2,262,418	303		303	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度	248,249		248,249	122		122	0.04
	当連結会計年度	235,408		235,408	63		63	0.02
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	78,544		78,544	148		148	0.18
	当連結会計年度	88,990		88,990	275		275	0.30
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	153,745		153,745	369		369	0.24
	当連結会計年度	152,886		152,886	401		401	0.26
うち借入金	前連結会計年度	65,739		65,739	70		70	0.10
	当連結会計年度	112,309		112,309	70		70	0.06

(注) 1 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度200,420百万円、当連結会計年度317,589百万円)を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度11,624百万円、当連結会計年度11,049百万円)及び利息(前連結会計年度6百万円、当連結会計年度5百万円)を、それぞれ控除して表示しております。

2 「相殺消去額()」は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息であります。

(参考)

(3) 国内業務部門・国際業務部門別役務取引の状況

役務取引等収益は、預り資産手数料および受入機能提供手数料の増加により188百万円増加して8,190百万円、役務取引等費用は、支払ローン関係手数料の増加により110百万円増加して4,334百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	7,961	40	8,002
	当連結会計年度	8,148	41	8,190
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	3,340		3,340
	当連結会計年度	3,562		3,562
うち為替業務	前連結会計年度	2,120	39	2,160
	当連結会計年度	2,100	40	2,141
うち代理業務	前連結会計年度	1,489		1,489
	当連結会計年度	1,494		1,494
うち証券関連業務	前連結会計年度	473		473
	当連結会計年度	579		579
役務取引等費用	前連結会計年度	4,192	31	4,224
	当連結会計年度	4,300	34	4,334
うち為替業務	前連結会計年度	381	31	413
	当連結会計年度	379	34	413

(注) 「国内業務部門」は国内店の円建取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。

(参考)

(4) 国内業務部門・国際業務部門別預金残高の状況

預金の種類別残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	2,220,478	4,020	2,224,498
	当連結会計年度	2,351,672	5,567	2,357,240
うち流動性預金	前連結会計年度	1,436,620		1,436,620
	当連結会計年度	1,545,309		1,545,309
うち定期性預金	前連結会計年度	742,500		742,500
	当連結会計年度	776,499		776,499
うちその他	前連結会計年度	41,357	4,020	45,377
	当連結会計年度	29,864	5,567	35,431
譲渡性預金	前連結会計年度	169,322		169,322
	当連結会計年度	129,968		129,968
総合計	前連結会計年度	2,389,801	4,020	2,393,821
	当連結会計年度	2,481,641	5,567	2,487,208

(注) 1 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金

2 定期性預金 = 定期預金 + 定期積金

3 「国内業務部門」は国内店の円建取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は「国際業務部門」に含めております。

(参考)

(5) 貸出金残高の状況

業種別貸出状況(未残・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内店分 (除く特別国際金融取引勘定分)	1,841,788	100.00	1,930,172	100.00
製造業	112,704	6.12	115,783	6.00
農業、林業	28,008	1.52	30,615	1.59
漁業	3,254	0.18	4,968	0.26
鉱業、採石業、砂利採取業	1,062	0.06	686	0.04
建設業	44,452	2.41	48,860	2.53
電気・ガス・熱供給・水道業	58,439	3.17	62,008	3.21
情報通信業	9,563	0.52	9,873	0.51
運輸業、郵便業	41,024	2.23	45,196	2.34
卸売業、小売業	124,736	6.77	133,004	6.89
金融業、保険業	43,673	2.37	37,611	1.95
不動産業、物品賃貸業	278,049	15.10	309,477	16.03
学術研究、専門・技術サービス業	5,977	0.33	7,248	0.37
宿泊業、飲食サービス業	17,746	0.96	18,111	0.94
生活関連サービス業、娯楽業	23,362	1.27	22,903	1.19
教育、学習支援業	7,630	0.41	7,839	0.41
医療、福祉	150,212	8.16	154,794	8.02
その他サービス業	31,268	1.70	29,951	1.55
地方公共団体	319,804	17.36	298,668	15.47
その他	540,825	29.36	592,577	30.70
特別国際金融取引勘定分				
政府等				
その他				
合計	1,841,788		1,930,172	

外国政府等向け債権残高(国別)

IMFの監督下で経済再建等を行っている国の外国政府等一定のカントリーリスクを有すると考えられる外国政府等向け債権残高はありません。

(参考)

(6) 国内業務部門・国際業務部門別有価証券の状況
有価証券残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	301,573		301,573
	当連結会計年度	249,168		249,168
地方債	前連結会計年度	140,399		140,399
	当連結会計年度	146,795		146,795
短期社債	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
社債	前連結会計年度	122,149		122,149
	当連結会計年度	101,283		101,283
株式	前連結会計年度	53,138		53,138
	当連結会計年度	53,013		53,013
その他の証券	前連結会計年度	76,026	72,794	148,821
	当連結会計年度	88,632	46,433	135,065
合計	前連結会計年度	693,287	72,794	766,082
	当連結会計年度	638,892	46,433	685,326

(注) 「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号。以下、「告示」という。)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

(単位：億円、%)

	平成30年3月31日
1. 連結自己資本比率(2/3)	9.51
2. 連結における自己資本の額	1,461
3. リスク・アセットの額	15,356
4. 連結総所要自己資本額	614

単体自己資本比率(国内基準)

(単位：億円、%)

	平成30年3月31日
1. 自己資本比率(2/3)	9.47
2. 単体における自己資本の額	1,445
3. リスク・アセットの額	15,247
4. 単体総所要自己資本額	609

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のもに区分される債権をいう。

資産の査定額(単体)

債権の区分	平成29年3月31日	平成30年3月31日
	金額(億円)	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	29	31
危険債権	208	182
要管理債権	70	99
正常債権	18,200	19,078

(生産、受注及び販売の状況)

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

4 【経営上の重要な契約等】

該当ありません。

5 【研究開発活動】

該当ありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

セグメントごとの設備投資については、次のとおりであります。

銀行業においては、日向支店・椎葉出張所を移転新設しました。

リース業およびその他事業においては、主要な設備の投資等はありません。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

(平成30年3月31日現在)

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグ メントの 名称	設備の 内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
						面積(㎡)	帳簿価額(百万円)					
当 行		本店	宮崎県 宮崎市	銀行業	店舗	(49) 4,941	1,876	1,527	114	195	3,713	345
		県庁支店 他35カ店	同 宮崎地区	銀行業	店舗	(5,228) 35,828	3,915	1,156	60	128	5,260	349
		西都支店 他4カ店	同 西都地区	銀行業	店舗	(43) 7,032	296	287	9	32	626	57
		都城営業部 他14カ店	同 都城地区	銀行業	店舗	(119) 17,684	1,106	1,241	58	50	2,457	144
		小林支店 他5カ店	同 小林地区	銀行業	店舗	(37) 6,836	317	35	6	26	386	51
		油津支店 他4カ店	同 日南地区	銀行業	店舗	(30) 5,822	369	307	14	17	709	50
		日向支店 他5カ店	同 日向地区	銀行業	店舗	(69) 6,373	369	65	37	24	498	57
		延岡営業部 他10カ店	同 延岡地区	銀行業	店舗	(2,690) 8,631	535	153	19	42	751	118
		鹿児島 営業部 他5カ店	鹿児島県 鹿児島市 他	銀行業	店舗	(375) 5,721	1,936	782	21	15	2,755	139
		大分支店	大分県 大分市	銀行業	店舗	672	298	11	1	1	312	6
		熊本支店	熊本県 熊本市	銀行業	店舗			3	0		4	6
		福岡支店	福岡県 福岡市	銀行業	店舗			20	0	1	22	14
		大阪支店	大阪府 大阪市	銀行業	店舗	402	316	24	0	0	342	6
		東京支店	東京都 中央区	銀行業	店舗			24	1	2	28	8
	事務 センター	宮崎県 宮崎市	銀行業	事務 センター	3,574	694	794	247		1,737	86	
	社宅・寮	宮崎県 宮崎市他	銀行業	社宅・寮 厚生施設	32,139	1,660	1,463	1		3,125		
連結子 会社	宮銀ビジネス サービス(株)	本社	宮崎県 宮崎市	銀行業	事務所			27	0	3	31	54
	宮銀コン ピューター サービス(株)	本社	宮崎県 宮崎市	銀行業	事務所			78	41	7	127	53
	宮銀リース (株)	本社他	宮崎県 宮崎市他	リース業	事務所 店舗			59	1	332	393	29
	宮銀ベン チャーキャ ピタル(株)	本社	宮崎県 宮崎市	その他	事務所			0	0	0	0	2
	宮銀保証(株)	本社	宮崎県 宮崎市	その他	事務所			23	0	11	34	17
	宮銀カード (株)	本社	宮崎県 宮崎市	その他	事務所			1	0	6	7	13

- (注) 1 当行の主要な設備の大宗は、店舗、事務センターであるため、銀行業に一括計上しております。
2 土地の面積欄の()内は、借地の面積(内書き)であり、その年間賃借料は建物も含め406百万円でありま
す。
3 動産は、事務機械362百万円、その他277百万円であります。
4 当行の店舗外現金自動設備140カ所は上記に含めて記載しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

(1) 新設、改修

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	セグメン トの名称	設備の内容	投資予定金額 (百万円)		資金調 達方法	着手 年月	完了予定 年月
						総額	既支払額			
当行	電算関係	宮崎市	新設	銀行業	事務機器	4,422		自己資金		
当行	佐土原 支店	宮崎市	新設	銀行業	建物	215	59	自己資金	平成30年 2月	平成31年 3月

(注) 上記設備計画の記載金額には、消費税及び地方消費税を含んでおりません。

(2) 売却

重要な設備の売却については、該当ありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	29,710,000
計	29,710,000

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。これにより、発行可能株式総数は267,390,000株減少し、29,710,000株となっております。

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成30年6月26日)	上場金融商品取引所名又は 登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	17,633,400	同左	東京証券取引所市場第一部 福岡証券取引所	単元株式数は 100株であり ます。
計	17,633,400	同左		

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合及び1,000株を100株とする単元株式数の変更を実施いたしました。これにより発行済株式数は158,700,600株減少し、17,633,400株となっております。

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

() 平成25年6月27日開催の定時株主総会において決議されたもの

当該制度は、会社法第361条に基づき株式報酬型ストックオプションとして、取締役に対して新株予約権を年額70万円以内の範囲で割り当てることを、平成25年6月27日の定時株主総会において決議されたものであり、その内容は次のとおりであります。

決議年月日	平成25年6月27日
付与対象者の区分	当行の取締役
新株予約権の目的となる株式の種類	当行普通株式
株式の数	400,000株を各事業年度に係る定時株主総会の日から1年以内の日に発行する新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式数の上限とする。 新株予約権1個当たりの目的である株式の数(以下、「付与株式数」という。)は100株とする。 なお、当行が、当行普通株式につき、株式分割または株式併合等を行うことにより、付与株式数の調整を行うことが適切な場合は、当行は必要と認める調整を行うものとする。
新株予約権の行使時の払込金額	新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式1株当たりの金額を1円とし、これに付与株式数の総数を乗じた金額とする。
新株予約権の行使期間	新株予約権を割り当てる日の翌日から30年以内の範囲で、取締役会において定める。
新株予約権の行使の条件	新株予約権者は、上記の行使期間内において、原則として、当行の取締役の地位を喪失した日の翌日から新株予約権を行使することができるものとする。
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、取締役会の決議による承認を要するものとする。
代用払込みに関する事項	
組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	

() 平成28年6月24日開催の定時株主総会において決議されたもの

当該制度は、会社法第361条に基づき株式報酬型ストックオプションとして、取締役（監査等委員である取締役を除く。）に対して新株予約権を年額70百万円以内の範囲で割り当てることを、平成28年6月24日の定時株主総会において決議されたものであり、その内容は次のとおりであります。

決議年月日	平成28年6月24日
付与対象者の区分	当行の取締役（監査等委員である取締役を除く。）
新株予約権の目的となる株式の種類	当行普通株式
株式の数	400,000株を各事業年度に係る定時株主総会の日から1年以内の日に発行する新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式数の上限とする。 新株予約権1個当たりの目的である株式の数(以下、「付与株式数」という。)は100株とする。 なお、当行が、当行普通株式につき、株式分割または株式併合等を行うことにより、付与株式数の調整を行うことが適切な場合は、当行は必要と認める調整を行うものとする。
新株予約権の行使時の払込金額	新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式1株当たりの金額を1円とし、これに付与株式数の総数を乗じた金額とする。
新株予約権の行使期間	新株予約権を割り当てる日の翌日から30年以内の範囲で、取締役会において定める。
新株予約権の行使の条件	新株予約権者は、上記の行使期間内において、原則として、当行の取締役の地位を喪失した日の翌日から新株予約権を行使することができるものとする。
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、取締役会の決議による承認を要するものとする。
代用払込みに関する事項	
組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	

() 取締役会において決議されたもの

会社法第263条、第238条、第240条に基づき発行した新株予約権は、次のとおりであります。

当事業年度の末日（平成30年3月31日）における内容を記載しており、当事業年度の末日から提出日の前月末現在（平成30年5月31日）にかけて変更された事項はありません。

なお、平成29年10月1日付で実施した普通株式10株を1株とする株式併合により、「新株予約権の目的となる株式の数」および「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本金組入額」が調整されております。

決議年月日	平成25年6月27日	平成26年6月26日	平成27年6月25日
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 8名	当行の取締役（社外取締役を除く） 8名	同左 9名
新株予約権の数	951個（注）1	1,055個（注）1	1,066個（注）1
新株予約権の目的となる株式の種類	当行普通株式	同左	同左
新株予約権の目的となる株式の数	9,510株（注）2	10,550株（注）2	10,660株（注）2
新株予約権行使時の払込金額	1株当たり1円	同左	同左
新株予約権の行使期間	平成25年8月1日から平成55年7月31日まで	平成26年8月1日から平成56年7月31日まで	平成27年8月1日から平成57年7月31日まで
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本金組入額	発行価格 2,630円 資本金組入額は、会社計算規則第17条第1項の規定に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げる。	発行価格 3,260円 同左	発行価格 3,620円 同左
新株予約権の行使の条件	（注）3	同左	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、当行取締役会の決議による承認を要するものとする。	同左	同左
組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	（注）4	同左	同左

決議年月日	平成28年6月24日	平成29年6月27日
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役（監査等委員である取締役を除く） 9名	同左 9名
新株予約権の数	1,948個（注）1	1,300個（注）1
新株予約権の目的となる株式の種類	当行普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数	19,480株（注）2	13,000株（注）2
新株予約権行使時の払込金額	1株当たり1円	同左
新株予約権の行使期間	平成28年7月30日から平成58年7月29日まで	平成29年8月1日から平成59年7月31日まで
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額	発行価格 2,640円 資本組入額は、会社計算規則第17条第1項の規定に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げる。	発行価格 3,500円 同左
新株予約権の行使の条件	（注）3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、当行取締役会の決議による承認を要するものとする。	同左
組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	（注）4	同左

- (注) 1 新株予約権1個当たりの目的となる株式数（以下、「付与株式数」という。） 10株
- 2 新株予約権割当日日以降、当行が当行普通株式の株式分割または株式併合を行う場合には、次の算式による付与株式数の調整を行い、調整の結果生じる1株未満の端数は、これを切り捨てる。
調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 株式分割または株式併合の比率
また、割当日以降、当行が合併または会社分割を行う場合、その他これらの場合に準じて付与株式数の調整を必要とする場合には、当行は、合理的な範囲で付与株式数を適切に調整することができる。
- 3 新株予約権の行使の条件
- (1) 新株予約権者は、当行の取締役の地位を喪失した日（以下、「地位喪失日」という。）の翌日以降、新株予約権を行使することができる。
- (2) 上記(1)にかかわらず、新株予約権者は、「新株予約権の行使期間」において、以下の または に定める場合には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できる。
新株予約権者が新株予約権の行使期間満了日の1年前までに地位喪失日を迎えなかった場合
平成25年6月27日開催の取締役会において決議されたもの：平成54年8月1日から平成55年7月31日
平成26年6月26日開催の取締役会において決議されたもの：平成55年8月1日から平成56年7月31日
平成27年6月25日開催の取締役会において決議されたもの：平成56年8月1日から平成57年7月31日
平成28年6月24日開催の取締役会において決議されたもの：平成57年7月30日から平成58年7月29日
平成29年6月27日開催の取締役会において決議されたもの：平成58年8月1日から平成59年7月31日
当行が消滅会社となる合併契約承認の議案または当行が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当行株主総会で承認された場合（株主総会決議が不要な場合は、当行の取締役会決議がなされた場合）
当該承認日の翌日から15日間
- (3) 上記(1)および(2)は、新株予約権を相続により承認した者については適用しない。
- (4) 新株予約権者が新株予約権を放棄した場合、当該新株予約権を行使することができない。
- 4 組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項
- 当行が、合併（当行が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割若しくは新設分割（それぞれ当行が分割会社となる場合に限る。）または株式交換若しくは株式移転（それぞれ当行が完全子会社となる場合に限る。）（以上を総称して以下、「組織再編行為」という。）をする場合には、組織再編行為の効力発生日（吸収合併につき吸収合併がその効力を生ずる日、新設合併につき新設合併設立株式会社の成立の日、吸収分割につき吸収分割がその効力を生ずる日、新設分割につき新設分割設立株式会社の成立の日、株式交換につき株式交換がその効力を生ずる日および株式移転につき株式移転設立完全親会社の成立の日をいう。以下同じ。）の直前において残存する新株予約権（以下、「残存新株予約権」という。）を保有する新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号イからホまでに掲げる株式会社（以下、「再編対象会社」という。）の新株予約権をそれぞれ交付することとする。以下の各号に沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約または株式移転計画において定めることを条件とする。
- (1) 交付する再編対象会社の新株予約権の数
新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付する。
- (2) 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の種類
再編対象会社の普通株式とする。

- (3) 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数
組織再編行為の条件等を勘案の上、(注)2に準じて決定する。
- (4) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額
交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編後行使価額に上記(3)に従って決定される当該新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数に乗じて得られる金額とする。再編後行使価額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編対象会社の株式1株当たり1円とする。
- (5) 新株予約権を行使することができる期間
新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、新株予約権を行使することができる期間の満了日までとする。
- (6) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項
新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数はこれを切り上げる。
新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記記載の資本金等増加限度額から上記に定める増加する資本金の額を減じた額とする。
- (7) 譲渡による新株予約権の取得の制限
譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の取締役会の決議による承認を要する。
- (8) 新株予約権の取得条項
以下の、またはの議案につき当行株主総会で承認された場合(株主総会決議が不要の場合は、当行の取締役会決議がなされた場合)は、当行取締役会が別途定める日に、当行は無償で新株予約権を取得することができる。
当行が消滅会社となる合併契約承認の議案
当行が分割会社となる分割契約若しくは分割計画承認の議案
当行が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案
当行の発行する全部の株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当行の承認を要することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
新株予約権の目的である種類の株式の内容として譲渡による当該種類の株式の取得について当行の承認を要すること若しくは当該種類の株式について当行が株主総会の決議によってその全部を取得することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
- (9) その他の新株予約権の行使の条件
上記(注)3に準じて決定する。

() 平成30年6月26日開催の取締役会において決議されたもの

当該制度は、会社法第236条、第238条及び第240条の規定に基づく株式報酬型ストックオプションとして、取締役に対して新株予約権を割り当てることを、平成30年6月26日の取締役会において決議されたものであり、その内容は次のとおりであります。

決議年月日	平成30年6月26日
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役(監査等委員である取締役を除く)9名
新株予約権の目的となる株式の種類	当行普通株式、[募集事項]4に記載しております。
株式の数	12,540株、[募集事項]4に記載しております。
新株予約権の行使時の払込金額	新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式1株当たりの金額を1円とし、これに付与株式数の総数を乗じた金額とする。
新株予約権の行使期間	[募集事項]7に記載しております。
新株予約権の行使の条件	[募集事項]13に記載しております。
新株予約権の譲渡に関する事項	[美醜事項]9に記載しております。
組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	[募集事項]11に記載しております。

当行は、平成30年6月26日開催の取締役会において、当行の取締役に対して発行する新株予約権の募集事項について、次のとおり決議しております。

[募集事項]

- 新株予約権の名称 株式会社宮崎銀行第6回新株予約権
- 新株予約権の割り当ての対象者およびその人数 当行の取締役(監査等委員である取締役を除く)9名
- 新株予約権の総数 1,254個
上記総数は割当予定数であり、引き受けの申し込みがなされなかった場合など、割り当てる新株予約権の総数が減少したときは、割り当てる新株予約権の総数をもって発行する新株予約権の総数とする。
- 新株予約権の目的である株式の種類および数
新株予約権の目的である株式の種類は当行普通株式とし、各新株予約権の目的である株式の数(以下、「付与株式数」という。)は10株とする。ただし、新株予約権を割り当てる日(以下、「割当日」という。)以降、当行が当行普通株式の株式分割(当行普通株式の株式無償割当を含む。以下、株式分割の記載につき同じ。)または株式併合を行う場合には、次の算式により付与株式数の調整を行い、調整の結果生じる1株未満の端数は、これを切り捨てる。

調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 株式分割または株式併合の比率

調整後付与株式数は、株式分割の場合は、当該株式分割の基準日の翌日(基準日を定めないときはその効力発生日)以降、株式併合の場合は、その効力発生日以降、これを適用する。ただし、剰余金の額を減少して資本金または準備金を増加する議案が当行株主総会において承認されることを条件として株式分割が行われる場合で、当該株主総会の終結の日以前の日を株式分割のための基準日とする場合は、調整後付与株式数は、当該株主総会の終結の日の翌日以降、当該基準日の翌日に遡及してこれを適用する。

また、割当日以降、当行が合併または会社分割を行う場合、その他これらの場合に準じて付与株式数の調整を必要とする場合には、当行は、合理的な範囲で付与株式数を適切に調整することができる。

付与株式数の調整を行うときは、当行は調整後付与株式数を適用する日の前日までに、必要な事項を新株予約権原簿に記載された各新株予約権を保有する者(以下、「新株予約権者」という。)に通知または公告する。ただし、当該適用の日の前日までに通知または公告を行うことができない場合には、以後速やかに通知または公告する。

5. 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、当該各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる株式1株当たりの行使価額を1円とし、これに付与株式数を乗じた金額とする。

6. 新株予約権の払込金額の算定方法

各新株予約権の払込金額は、割当日においてブラック・ショールズモデルに基づき算出した金額とする。なお、当該金額は新株予約権の公正価額であり、割り当てを受ける者(以下、「新株予約権者」という。)が、当行に対して有する新株予約権の払込金額の総額に相当する金額の報酬債権と新株予約権の払込金額の払込債務とが相殺される。

7. 新株予約権を行使することができる期間

平成30年8月1日から平成60年7月31日までとする。

ただし、権利行使期間の最終日が当行の休業日にあたる場合は、その前営業日を最終日とする。

8. 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項

(1)新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げる。

(2)新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記(1)記載の資本金等増加限度額から上記(1)に定める増加する資本金の額を減じた額とする。

9. 譲渡による新株予約権の取得の制限

譲渡による新株予約権の取得については、当行取締役会の決議による承認を要する。

10. 新株予約権の取得条項

以下の(1)、(2)、(3)、(4)または(5)の議案につき当行株主総会で承認された場合(株主総会決議が不要の場合は、当行の取締役会決議がなされた場合)は、当行取締役会が別途定める日に、当行は無償で新株予約権を取得することができる。

(1)当行が消滅会社となる合併契約承認の議案

(2)当行が分割会社となる分割契約若しくは分割計画承認の議案

(3)当行が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案

(4)当行の発行する全部の株式の内容として譲渡による当該株式の取得について当行の承認を要することについての定めを設ける定款の変更承認の議案

(5)新株予約権の目的である種類の株式の内容として譲渡による当該種類の株式の取得について当行の承認を要すること若しくは当該種類の株式について当行が株主総会の決議によってその全部を取得することについての定めを設ける定款の変更承認の議案

11. 組織再編における再編対象会社の新株予約権の交付の内容に関する決定方針

当行が、合併(当行が合併により消滅する場合に限る。)、吸収分割若しくは新設分割(それぞれ当行が分割会社となる場合に限る。)または株式交換若しくは株式移転(それぞれ当行が完全子会社となる場合に限る。)(以上を総称して以下、「組織再編行為」という。)をする場合には、組織再編行為の効力発生日(吸収合併につき吸収合併がその効力を生ずる日、新設合併につき新設合併設立株式会社の成立の日、吸収分割につき吸収分割がその効力を生ずる日、新設分割につき新設分割設立株式会社の成立の日、株式交換につき株式交換がその効力を生ずる日および株式移転につき株式移転設立完全親会社の成立の日をいう。以下同じ。)の直前において残存する新株予約権(以下、「残存新株予約権」という。)を保有する新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号イからホまでに掲げる株式会社(以下、「再編対象会社」という。)の新株予約権をそれぞれ交付することとする。以下の各号に沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約または株式移転計画において定めることを条件とする。

(1)交付する再編対象会社の新株予約権の数

新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付する。

(2)新株予約権の目的である再編対象会社の株式の種類

再編対象会社の普通株式とする。

(3)新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数

組織再編行為の条件等を勘案の上、上記4.に準じて決定する。

(4)新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編後行使価額に上記(3)に従って決定される当該新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数を乗じて得られる金額とする。再編後行使価額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編対象会社の株式1株当たり1円とする。

(5)新株予約権を行使することができる期間

- 上記7. に定める新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、上記7. に定める新株予約権を行使することができる期間の満了日までとする。
- (6)新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項
上記8. に準じて決定する。
- (7)譲渡による新株予約権の取得の制限
譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の取締役会の決議による承認を要する。
- (8)新株予約権の取得条項
上記10. に準じて決定する。
- (9)その他の新株予約権の行使の条件
下記13. に準じて決定する。
12. 新株予約権を行使した際に生じる1株に満たない端数の取決め
新株予約権を行使した新株予約権者に交付する株式の数に1株に満たない端数がある場合には、これを切り捨てる。
13. その他の新株予約権の行使の条件
(1)新株予約権者は、当行の取締役の地位を喪失した日(以下、「地位喪失日」という。)の翌日以降、新株予約権を行使することができる。
(2)上記(1)にかかわらず、新株予約権者は、上記7. の期間内において、以下の または に定める場合(ただし、 については、上記11. に従って新株予約権者に再編対象会社の新株予約権が交付される旨が合併契約、株式交換契約若しくは株式移転計画において定められている場合を除く。)には、それぞれに定める期間内に限り新株予約権を行使できる。
新株予約権者が平成59年7月31日に至るまでに地位喪失日を迎えなかった場合
平成59年8月1日から平成60年7月31日
当行が消滅会社となる合併契約承認の議案または当行が完全子会社となる株式交換契約若しくは株式移転計画承認の議案につき当行株主総会で承認された場合(株主総会決議が不要な場合は、当行の取締役会決議がなされた場合)
当該承認日の翌日から15日間
(3)上記(1)および(2) は、新株予約権を相続により承継した者については適用しない。
(4)新株予約権者が新株予約権を放棄した場合、当該新株予約権を行使することができない。
14. 新株予約権を割り当てる日 平成30年7月31日
15. 新株予約権と引き換えにする金銭の払い込みの期日 平成30年7月31日

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成29年10月1日 (注)	158,700	17,633		14,697		8,771

(注) 株式併合(10株を1株に併合)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	26	55	22	586	158	1	4,437	5,285	
所有株式数(単元)	2,624	70,404	2,434	36,326	24,676	1	38,829	175,294	104,000
所有株式数の割合(%)	1.50	40.16	1.39	20.72	14.08	0.00	22.15	100.00	

- (注) 1 自己株式420,062株は「個人その他」に4,200単元、「単元未満株式の状況」に62株含まれております。
 2 「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ1単元及び70株含まれております。
 3 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合及び1,000株を100株とする単元株式数の変更を実施いたしました。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8-11	535	3.10
宮崎銀行従業員持株会	宮崎市橘通東四丁目3-5	466	2.70
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神二丁目13-1	457	2.65
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6-6	441	2.56
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内二丁目1-1	440	2.55
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO (常任代理人 シティバンク銀行 株式会社)	PALISADES WEST 6300,BEE CAVE ROAD BUILDING ONE AUSTIN TX 78746 US (東京都新宿区新宿六丁目27-30)	413	2.40
株式会社鹿児島銀行	鹿児島市金生町6-6	386	2.24
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11-3	381	2.21
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海一丁目8-11	326	1.89
GOVERNMENT OF NORWAY (常任代理人 シティバンク銀行 株式会社)	BANKPLASSEN 2, 0107 OSLO 1 OSLO 0107 NO (東京都新宿区新宿六丁目27-30)	312	1.81
計		4,161	24.17

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 420,000		
完全議決権株式(その他)	普通株式 17,109,400	171,094	
単元未満株式	普通株式 104,000		1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	17,633,400		
総株主の議決権		171,094	

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」及び「単元未満株式」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ100株(議決権1個)及び70株含まれております。

2 「単元未満株式」には、当行所有の自己株式62株が含まれております。

3 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合及び1,000株を100株とする単元株式数の変更を実施いたしました。これにより発行済株式総数は158,700,600株減少し、17,633,400株となっております。

【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社 宮崎銀行	宮崎市橘通東 四丁目3番5号	420,000		420,000	2.38
計		420,000		420,000	2.38

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第7号及び同条第9号の規定に基づく普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(平成29年10月30日)での決議状況 (取得期間 平成29年10月30日～平成29年10月30日)	996	4,013,880
当事業年度前における取得自己株式		
当事業年度における取得自己株式	996	4,013,880
残存決議株式の総数及び価額の総額		
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)		
当期間における取得自己株式		
提出日現在の未行使割合(%)		

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。当該株式併合により発生した1株に満たない端数の買取であり、買取単価は、取得日の株式会社東京証券取引所における当行普通株式の終値であります。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	10,879	7,265,150
当期間における取得自己株式	161	576,800

(注) 1 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。

2 「当事業年度における取得自己株式」のうち、株式併合前に行った単元未満株式の買取りは9,918株、株式併合後に行った単元未満株式の買取りは961株であります。

3 「当期間における取得自己株式」には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他 (単元未満株式の売渡し請求による売渡し)	270	218,562		
(株式併合による減少)	3,763,276	2,821		
保有自己株式数	420,062		420,223	

(注) 1 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。

2 当事業年度における「その他(単元未満株式の売渡し請求による売渡し)」の株式数の内訳は、株式併合前(株式数234株、処分価額の総額87,282円)、株式併合後(株式数36株、処分価額の総額131,280円)であります。

3 当事業年度における「その他(株式併合による減少)」の処分価額の総額2,821円は、端数株式の売渡しによるものであります。

4 「当期間」には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの取引は含まれておりません。

3 【配当政策】

当行は、地域金融機関としての公共性と健全経営維持の観点から経営基盤並びに財務体質の強化を図るとともに、配当についても安定的な配当を継続していくことを基本方針としております。

当行の剰余金の配当は、中間配当および期末配当の年2回を基本的な方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当期の期末配当金につきましては、1株当たり45円とし、既に実施済みの中間配当金1株当たり4円50銭とあわせて年間49円50銭の配当とさせていただきます(平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。当該株式併合が平成29年度期首に行われたと仮定すると、普通株式1株当たりの配当金は中間・期末ともに45円、年間配当は90円となります。)。この結果、当期の配当性向は17.66%となりました。内部留保金につきましては、自己資本の充実に資するとともに、店舗・システム関係などの設備資金として活用させていただき、業績の伸展や顧客サービスの向上に努めてまいります。

なお、第133期の剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
平成29年11月10日 取締役会決議	774	4.50
平成30年6月26日 定時株主総会決議	774	45.00

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第129期	第130期	第131期	第132期	第133期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高(円)	354	500	495	393	4,150 [421]
最低(円)	250	281	255	231	3,145 [326]

(注)1 最高・最低株価は東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

2 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。第133期については当該株式併合後の最高・最低株価を記載し、[]内に株式併合前の最高・最低株価を記載しております。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高(円)	4,150	4,090	3,925	3,950	3,745	3,515
最低(円)	3,745	3,510	3,395	3,525	3,295	3,145

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員 の 状 況】

男性14名 女性1名 (役員のうち女性の比率6.6%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役頭取 (代表取締役)		平野 亘也	昭和27年 6月12日生	昭和50年4月 宮崎銀行入行 平成17年6月 延岡支店長 平成19年6月 取締役経営企画部長兼収益管理室長 平成22年6月 常務取締役本店営業部長 平成23年6月 常務取締役 平成24年6月 専務取締役 平成25年6月 代表取締役(現職) 平成27年6月 取締役頭取(現職)	平成30年 6月から 1年	5
専務取締役 (代表取締役)		原口 哲二	昭和31年 8月13日生	昭和54年4月 宮崎銀行入行 平成22年6月 大淀支店長 平成23年6月 取締役鹿児島営業部長 平成26年6月 常務取締役 平成27年6月 常務取締役営業統括部長 兼個人ローン推進室長 兼事業承継・M&A支援室長 平成28年6月 常務取締役 平成29年4月 専務取締役(現職) 平成30年6月 代表取締役(現職)	平成30年 6月から 1年	2
常務取締役		杉田 浩二	昭和33年 10月22日生	昭和56年4月 宮崎銀行入行 平成23年4月 営業統括部長 平成24年6月 取締役経営企画部長兼収益管理室長 平成26年6月 取締役本店営業部長兼江平支店長 平成27年6月 常務取締役(現職)	平成30年 6月から 1年	1
常務取締役		河内 克典	昭和35年 5月21日生	昭和58年4月 宮崎銀行入行 平成25年4月 証券国際部長 平成26年4月 市場金融部長 平成27年6月 取締役経営企画部長兼収益管理室長 平成29年4月 取締役経営企画部長兼収益管理室長 兼IT戦略室長 平成30年4月 常務取締役(現職)	平成30年 6月から 1年	1
取締役	本店営業部長 兼江平支店長	大坪 泰三	昭和34年 2月28日生	昭和57年4月 宮崎銀行入行 平成24年6月 審査部長 平成26年3月 理事審査部長 平成26年6月 取締役鹿児島営業部長 平成29年4月 取締役本店営業部長兼江平支店長(現職)	平成30年 6月から 1年	1
取締役	鹿児島営業部長	星原 一弘	昭和35年 2月7日生	昭和57年4月 宮崎銀行入行 平成24年6月 人事部長兼品質向上推進室長 平成26年4月 人事部長 平成26年6月 取締役都城営業部長 平成29年4月 取締役鹿児島営業部長(現職)	平成30年 6月から 1年	2
取締役	都城営業部長	山田 知樹	昭和35年 4月30日生	昭和58年4月 宮崎銀行入行 平成24年6月 営業統括部長 平成26年4月 営業統括部長 兼個人ローン推進室長 兼事業承継・M&A支援室長 平成27年6月 取締役本店営業部長兼江平支店長 平成29年4月 取締役都城営業部長(現職)	平成30年 6月から 1年	1
取締役	経営企画部長 兼収益管理室長 兼IT戦略室長	日高 啓司	昭和37年 10月2日生	昭和61年4月 宮崎銀行入行 平成27年6月 市場金融部長 平成29年6月 執行役員市場金融部長 平成30年4月 執行役員経営企画部長兼収益管理室長 兼IT戦略室長 平成30年6月 取締役経営企画部長兼収益管理室長 兼IT戦略室長(現職)	平成30年 6月から 1年	1
取締役	人事部長	西川 義久	昭和40年 2月13日生	昭和62年4月 宮崎銀行入行 平成27年6月 福岡支店長 平成29年4月 人事部長 平成30年6月 取締役人事部長(現職)	平成30年 6月から 1年	0

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (監査等委員)		関本泰三	昭和32年 8月6日生	昭和55年4月 宮崎銀行入行 平成22年6月 審査部長 平成24年6月 取締役本店営業部長 平成25年4月 取締役本店営業部長兼江平支店長 平成26年6月 取締役経営企画部長兼収益管理室長 平成27年6月 常務取締役 平成30年6月 取締役(監査等委員)(現職)	平成30年 6月から 2年	2
取締役 (監査等委員)		山下耕司	昭和37年 8月7日生	昭和60年4月 宮崎銀行入行 平成27年6月 個人金融部長 平成29年4月 マネーコンサルティング部長 平成29年6月 取締役(監査等委員)(現職)	平成29年 6月から 2年	1
取締役 (監査等委員)		山内純子	昭和24年 9月13日生	昭和45年1月 全日本空輸株式会社入社 平成19年6月 全日本空輸株式会社 取締役執行役員客室本部長 平成21年4月 株式会社ANA総合研究所取締役副社長 平成22年4月 ANAラーニング株式会社取締役会長 平成24年4月 ANAラーニング株式会社顧問 平成25年3月 ANAラーニング株式会社顧問退任 平成27年6月 宮崎銀行取締役 株式会社ミクニ社外監査役(現職) 平成28年6月 宮崎銀行取締役(監査等委員)(現職)	平成30年 6月から 2年	0
取締役 (監査等委員)		島津久友	昭和33年 9月26日生	昭和56年4月 農林中央金庫入庫 平成19年4月 農林中央金庫退職 平成19年5月 島津山林株式会社常務取締役 株式会社島津茶園常務取締役 平成21年9月 島津山林株式会社代表取締役(現職) 平成23年9月 株式会社ハンズマン社外監査役(現職) 平成25年6月 株式会社島津茶園代表取締役(現職) 平成27年6月 宮崎銀行監査役 平成28年6月 宮崎銀行取締役(監査等委員)(現職)	平成30年 6月から 2年	3
取締役 (監査等委員)		萩元重喜	昭和27年 8月16日生	昭和61年4月 弁護士登録 萩元法律事務所開設 平成17年4月 宮崎県弁護士会会長就任 平成18年3月 宮崎県弁護士会会長退任 平成26年6月 宮崎銀行補欠監査役 平成28年6月 宮崎銀行取締役(監査等委員)(現職)	平成30年 6月から 2年	0
取締役 (監査等委員)		稲用博美	昭和28年 3月10日生	昭和50年7月 宮崎県庁入庁 平成25年3月 宮崎県庁退職 平成25年4月 宮崎県副知事 平成29年3月 宮崎県副知事退任 平成29年4月 公立大学法人宮崎県立看護大学 理事長(現職) 平成30年6月 宮崎銀行取締役(監査等委員)(現職)	平成30年 6月から 2年	
計						25

(注) 1. 取締役 山内純子、島津久友、萩元重喜及び稲用博美は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。

2. 監査等委員会の体制は、次のとおりであります。

委員長 関本泰三、委員 山下耕司、委員 山内純子、委員 島津久友、委員 萩元重喜、委員 稲用博美
なお、関本泰三および山下耕司は、常勤の監査等委員であります。

3. 当行は、業務執行機能の強化と組織活性化を目的として執行役員制度を導入しております。有価証券報告書提出日現在の執行役員は次のとおりであります。

執行役員 (延岡営業部長) 吉田 秀 朗
執行役員 (審査部長) 後 藤 雅 彰

(内部統制システムの整備の状況)

当行では、取締役会において会社法第399条の13第1項第1号口に規定する「監査等委員会の職務の執行のため必要なものとして法務省令で定める事項」および同八に規定する「取締役の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制その他株式会社の業務並びに当該株式会社およびその子会社から成る企業集団の業務の適正を確保するために必要なものとして法務省令で定める体制の整備」について、以下のとおり決議しております。

なお、本方針は年1回あるいは必要に応じて見直しを行うことにより、内部統制の充実強化を図ることとしております。

<内部統制に関する基本方針>

1. 当行の取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
以下により、取締役および従業員の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するものとする。
 - (1) 行是綱要を企業活動の根本理念とし、従業員向けには「就業規則並びに付属規程」を定め、実際的な行動の際の指針とする。
 - (2) コンプライアンス態勢として「法令等遵守方針」、法令等遵守基準として「行動憲章」を設け、コンプライアンス態勢に係る規程として「法令等遵守規程」、手順書として「法令等遵守マニュアル」を定める。
 - (3) コンプライアンスの徹底を図るため、リスク統括部に「法務室」を設置し、コンプライアンスに係る統括部署として位置付け、コンプライアンスに関する情報等の一元管理を行い、定期的に「法令等遵守委員会」を開催して「取締役会」に付議・報告する態勢とする。
 - (4) 取締役会がコンプライアンスに関する年度（または半期）計画を策定し、これに沿ってリスク統括部法務室および各業務所管部が従業員教育を展開するとともに、各部署の日常的な活動状況のチェックおよび指導を実施する。
 - (5) リスク統括部法務室を事務局とするコンプライアンスに係るリスク・ホットライン（内部通報制度）を設け、当行役職員およびその他の人材派遣社員が、リスク統括部法務室またはリスク・ホットラインの通報および相談窓口を委託した行外受付窓口に通報、相談できる仕組みとする。
 - (6) リスク統括部および監査部は、日頃から連携して、全行のコンプライアンス態勢およびコンプライアンス上の問題の有無の調査にあたる。
 - (7) 反社会的勢力への対応に関する基本方針を定め、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力との関係および利益供与を排除し、当行の顧客等の被害を防止するため、毅然とした態度で組織的に対応する。
2. 当行の取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制
以下により、取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理を行うものとする。
 - (1) 法令および別途定める社内規則の規程に基づき、取締役会議事録ほかその重要度に応じて、決裁文書等の経営情報文書（電磁的記録を含むものとする）を関連資料とともに保存する。
 - (2) 前項に定める文書の保存期間および保存場所は、法令および別途定める社内規則の規程に基づき定める。
3. 当行の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
当行のリスク管理を体系的に定めた「内部管理基本方針」「リスク管理基本方針」を制定し、経営の健全性の確保と収益性の向上に取り組む。多様化・高度化するリスクを統合的に管理する部署としてリスク統括部を設置し、情報管理についてもリスク統括部内に情報管理室を設け、セキュリティを確保する。またリスク管理委員会を設置し、リスク全般に関して審議を行い経営の健全性の向上に努める。
リスク管理の規程では、全てのリスク管理の基本となるリスク管理基本方針に基づき、「統合的リスク管理規程」「自己資本管理規程」「信用リスク管理規程」「市場リスク管理規程」「流動性リスク管理規程」「オペリスク管理規程」「事務リスク管理規程」「システムリスク管理規程」「情報セキュリティ・リスク管理規程」「法務リスク管理規程」「人的リスク管理規程」「有形資産リスク管理規程」「風評リスク管理規程」を定める。また情報セキュリティについては、「情報セキュリティ基本方針」および具体的な管理手法を「情報セキュリティ基本規程」に定める。
4. 当行の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
取締役の職務執行の効率化を図るため、常務会、担当取締役制などの体制を整備する。また取締役会は、経営の執行方針、法令で定められた事項やその他経営に関する重要事項を決定し、業務執行状況を監督する。
5. 次に掲げる当行および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
当行を含む銀行グループにおける業務の適正は、以下により確保する。
 - (イ) 子会社の取締役の職務の執行に係る事項の当行への報告に関する体制
 - (1) 当行は、「グループ会社運営規程」に基づき、グループ会社に対して、業績や財務状況その他の重要な情報について、当行への定期的な報告を義務づける。
 - (2) 当行は、グループ会社の経営状況等を協議するため、当行のグループ会社担当取締役およびグループ会社の代表取締役等が参加する経営協議会を定期的に開催する。

- (ロ)子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
- (1)当行は、「グループ会社リスク管理規程」に基づき、リスクカテゴリー別に所管部署を定め、グループ会社のリスクを適切に管理・監視する。
 - (2)当行は、グループ会社に対して、リスクカテゴリー別の管理状況について、定期的な報告を義務付ける。
 - (3)「内部監査規程」に基づき、監査部がグループ会社のリスク管理の状況、規程等の遵守状況、社内検査の状況等について監査する。
 - (4)リスク統括部は、グループ会社のリスク管理状況について、リスク管理委員会および取締役会に定期的に付議または報告する。また、重要な事案が発生した場合も必要に応じて付議または報告する。
- (ハ)子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- (1)当行の取締役からグループ会社担当取締役を決め、事業の総括的な管理を行う体制とする。
 - (2)当行との連携を密にし、当行の経営方針を徹底するため、当行のグループ会社担当取締役およびグループ会社の代表取締役等が参加する経営協議会を定期的に開催する。
- (二)子会社の取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
- (1)当行は、グループ会社に対して、当行の「法令等遵守方針」に則り「法令等遵守規程(マニュアル)」を作成し、その遵守状況について、定期的に報告することを義務づける。
 - (2)リスク統括部は、グループ会社の法令等遵守状況について、法令等遵守委員会および取締役会に定期的に付議または報告する。また、重要な事案が発生した場合も必要に応じて付議または報告する。
 - (3)グループ会社のリスク・ホットラインについては、グループ会社の役職員が、当行のコンプライアンス部門であるリスク統括部法務室またはリスク・ホットラインの通報および相談窓口を委託した行外受付窓口へ直接通報、相談できる制度を設ける。
 - (4)当行およびグループ各社において財務報告の適正性を確保するため、「財務報告に係る内部統制基本方針」を定める。
6. 当行の監査等委員会の職務を補助すべき取締役および使用人に関する事項
- 監査等委員会がその職務を補助すべき取締役および従業員を置くことを求めた場合には、経営執行部門と独立した監査等委員会の職務を補助する者を置くものとする。
7. 前号の取締役および使用人の取締役(監査等委員である取締役を除く。)からの独立性および当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- 取締役および従業員は、前号の補助者の人事異動・人事評価・懲戒処分等に際しては、監査等委員会の同意を得るものとする。また、前号の補助者は業務の執行に係る職務を兼務しない。
8. 次に掲げる当行の監査等委員会への報告に関する体制
- (イ)当行の取締役(監査等委員である取締役を除く。)および使用人が当行の監査等委員会に報告をするための体制
- (1)取締役(監査等委員である取締役を除く。)および従業員は、社内規程等に基づき、監査等委員会に対し、法定事項以外にも法令等遵守およびリスク管理上重要な事項については報告するものとする。
 - (2)監査部は、グループ会社を含めた監査の結果について、監査等委員会に対し定期的に報告するものとする。
 - (3)リスク統括部は、グループ会社のリスク管理状況や法令等遵守状況も含めて、監査等委員の参加するリスク管理委員会、法令等遵守委員会、取締役会に定期的に付議または報告する。また、各部署は、グループ会社に関する事項も含め、社内規程等に定められた事項、重要な事項につき、監査等委員に直接報告するものとする。
- (ロ)子会社の取締役、監査役および使用人またはこれらの者から報告を受けた者が当行の監査等委員会に報告をするための体制
- リスク統括部法務室は、リスク・ホットラインに基づき通報された内容およびその調査結果について、監査等委員の参加する法令等遵守委員会において定期的に報告する。また、重要な事案が発生した場合、必要に応じて監査等委員に対し直接報告するものとする。
9. 前号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- リスク・ホットライン規程に基づき、通報者等(通報者に協力した者および調査に積極的に協力した者を含む)に対して、相談または通報したことを理由として解雇その他いかなる不利益な取扱い(懲戒処分、降格、減給等)も行わない。
10. 当行の監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項
- 監査等委員の職務の執行について生ずる費用等の支払いのため、毎年、一定額の予算を設ける。

11. その他当行の監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

代表取締役は、監査等委員会と定期的に会合をもち、当行が対処すべき課題、監査等委員会監査の環境整備の状況、監査上の重要課題等について意見を交換し、監査等委員との相互認識を深めるよう努力するものとする。

(会計監査の状況)

会計監査につきましては、有限責任監査法人トーマツによる法定監査を受けており、監査等委員会は会計監査人と監査計画および進捗状況等の定例会議を開催するとともに、監査結果報告における内部統制の整備状況等について意見交換を実施するなど、緊密な連携を図っております。

また、独立した内部監査部門である監査部も、会計監査人に内部監査結果を報告するとともに、内部統制監査等について意見交換を実施するなど、緊密な連携を図っております。

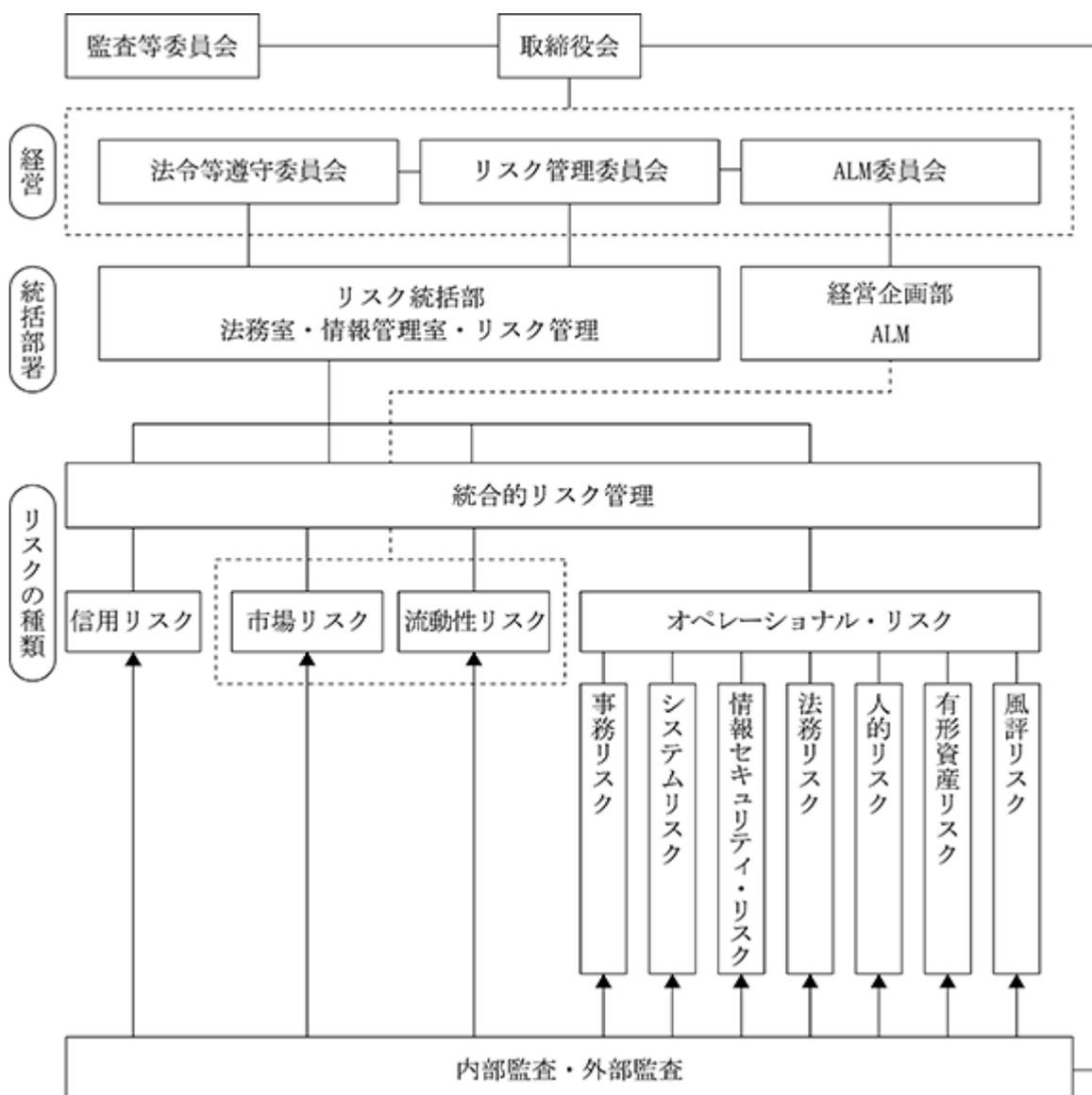
業務を執行した公認会計士の氏名	所属する監査法人名	継続監査年数
指定有限責任社員 業務執行社員 宮本 芳樹	有限責任監査法人トーマツ	
指定有限責任社員 業務執行社員 只隈 洋一	有限責任監査法人トーマツ	
指定有限責任社員 業務執行社員 城戸 昭博	有限責任監査法人トーマツ	

なお、監査業務に係る補助者は、公認会計士9名、その他5名であります。

(リスク管理体制の整備の状況)

内部統制の仕組みにつきましては、業務上発生するリスクへの対応に関して、リスク管理の統括部署および各リスク管理担当部署を明確に定め、相互牽制機能を十分発揮させる体制としております。
リスク管理体制を図によって示すと次のとおりであります。

リスク管理体制



内部監査及び監査等委員会監査の状況

当行は監査等委員会設置会社の体制をとっており、監査等委員である取締役6名のうち4名を社外取締役としております。監査等委員は議決権を有する取締役として取締役会に出席するほか、常勤の監査等委員が常務会に出席するなど、取締役に対する監査・監督機能を十分発揮できる体制となっております。

なお、監査等委員会を有効に機能させるため、監査等委員会室に専属スタッフを配置し、社外取締役を含めた監査等委員の職務執行を補佐しております。

また、独立した内部監査部門である監査部が、監査等委員会から調査の要請があった場合、調査を実施し結果を報告する等の連携を図るとともに、年度毎の監査計画に基づき、非監査部門から独立した立場から内部管理体制の適切性、有効性について総合的・客観的に評価・検証を行い、その内容については、四半期毎に監査等委員会および取締役会に報告を行う体制としております。なお、監査部の人員につきましては、平成30年3月期末現在で20名となっております。

社外取締役

当行は、監査等委員である社外取締役を4名選任しておりますが、いずれも当行および当行グループの出身ではなく、当行の他の取締役との人的関係や当行との間に通常の銀行取引以外に、特別な利害関係はありません。

社外取締役山内純子氏は、全日本空輸株式会社などで要職を歴任し、幅広い経験や知識を有しており、外部から見た経営全般に関する助言や、当行初めての女性役員として女性の登用推進についての有益な助言をいただくため、監査等委員である社外取締役に選任しております。

社外取締役島津久友氏は、金融機関等での幅広い経験、実績があり、また、代表者として会社経営に関する知見も有しており、外部から見た経営全般に関する助言をいただくため、監査等委員である社外取締役に選任しております。

社外取締役萩元重喜氏は、弁護士として法令等に関する専門的知見を有しており、その経験、見識を当行の経営に活かしていただくため、監査等委員である社外取締役に選任しております。

社外取締役稲用博美氏は、宮崎県庁において、総務部門、総合政策部門を経て、副知事を4年間務めるなど、豊富な経験と幅広い見識を有しており、経営に対する高度な監視機能発揮を期待し、監査等委員である社外取締役に選任しております。

なお、当行では、社外取締役を選任するための、当行からの独立性に関する基準を定めており、社外取締役の4名につきましては、当該基準に則り、当行との利害関係がなく、経営陣から独立した立場にあり、一般株主と利益相反の生じるおそれがないと判断していることから独立役員に選任しております。

社外取締役の山内純子氏、島津久友氏および萩元重喜氏は、当行の株式を所有しており、その所有株式数は、「第4 提出会社の状況 5 . 役員状況」の所有株式数の欄に記載のとおりであります。

1. 監査等委員である社外取締役は、以下のとおり、経営監視機能の客観性および中立性を確保しております。
 - (1)法令、企業統治等に関して専門的な知見を有しており、職歴、経験、知識等を生かして、適法性の監査に留まらず、外部の立場から経営全般について助言を行っております。
 - (2)外部からの視点で議決権を有する取締役として取締役に参加することにより、取締役の職務執行の状況について明確な説明を求めることとなり、経営監視の実効性を高めております。
2. 経営監視機能の強化に係る具体的な体制および実行状況は、以下のとおりです。
 - (1)監査等委員を補助する専属の使用人を配置するなど、それを支える十分な人材および体制を確保し、内部統制システムが適正に機能する体制を整えております。
 - (2)法令、定款違反や株主利益を侵害する事実の有無等の監査により、経営監視の強化に努めております。

役員の報酬等の内容

当事業年度の監査等委員でない取締役に対する報酬は251百万円、監査等委員である取締役に対する報酬は76百万円（うち社外取締役22百万円）であります。なお、この金額には役員賞与引当金繰入額40百万円（監査等委員でない取締役29百万円、監査等委員である取締役10百万円）およびストックオプション報酬（監査等委員でない取締役46百万円）を含んでおり、使用人兼務役員の使用人としての報酬71百万円（員数4名、内容は使用人部分の報酬（賞与を含む）71百万円、その他0百万円）を含んでおりません。

当事業年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

役員区分	員数	報酬等の 総額 (百万円)	報酬等の内訳			
			基本報酬	役員賞与 引当金 繰入額	ストック オプション 報酬	その他
監査等委員でない取締役	9	251	174	29	46	0
監査等委員である取締役 (社外取締役を除く。)	3	54	46	7		
社外役員	4	22	19	3		

(注) 1 員数には、平成29年6月27日開催の定時株主総会をもって退任した監査等委員である取締役1名を含んでおります。

なお、役員ごとの連結報酬等につきましては、連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

(報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針)

当行では、平成25年6月27日開催の定時株主総会の決議により、取締役の業績および企業価値向上への貢献意欲、ならびに株主重視の経営意識を従来以上に高めることを目的として、役員退職慰労金制度を廃止し、株式報酬型ストックオプション制度を導入しました。

また、あわせて監査役に対する役員退職慰労金制度を廃止しました。

さらに、当行は平成28年6月24日開催の定時株主総会の決議をもって監査等委員会設置会社に移行したことから、役員に対する報酬等は監査等委員でない取締役に対する「基本報酬」、「役員賞与」および「ストックオプション報酬」、監査等委員である取締役に対する「基本報酬」および「役員賞与」で構成されております。

「基本報酬」および「役員賞与」については、株主総会の決議により、取締役全員の報酬年額の最高限度額(監査等委員でない取締役年額300百万円、監査等委員である取締役年額100百万円)を決定しており、株主の監視が働く仕組みとなっております。

取締役(監査等委員である取締役を除く。)の報酬等は、株主総会で決議された額の範囲内において、監査等委員会の意見等を踏まえた上で、取締役会において決定いたします。監査等委員である取締役の報酬等は、株主総会で決議された額の範囲内において、監査等委員会の協議により決定いたします。

また、役員賞与は株主総会の決議による取締役全員の報酬年額の最高限度額の範囲内で、監査等委員会の意見等を踏まえた上で取締役会により決議された支給総額に基づいており、監査等委員でない取締役の支給額は取締役会で決定、監査等委員である取締役の支給額は監査等委員会の協議により決定しております。

なお、「ストックオプション報酬」の内容は、「第4 提出会社の状況」中、「1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況 ストックオプション制度の内容」に記載しております。

株式の保有状況

イ．保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の銘柄数及び貸借対照表計上額

銘柄数	104銘柄
貸借対照表計上額の合計額	34,250百万円

ロ．保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)

貸借対照表計上額が資本金額の100分の1を超える銘柄は次のとおりであります。

(特定投資株式)

銘柄	株式数 (千株)	貸借対照表 計上額(百万円)	保有目的
旭化成株式会社	4,850	5,238	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社九州フィナンシャルグループ	6,212	4,230	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社ふくおかフィナンシャルグループ	4,230	2,038	同上。
九州電力株式会社	1,504	1,784	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
東京海上ホールディングス株式会社	300	1,408	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社ハンズマン	701	1,229	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割をもつ同社との関係維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
WASHハウス株式会社	160	873	同上。
株式会社武蔵野銀行	215	711	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社淀川製鋼所	230	694	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
住友不動産株式会社	217	626	同上。
西部瓦斯株式会社	2,435	623	同上。
SOMPOホールディングス株式会社	150	612	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社九電工	192	582	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
総合メディカル株式会社	137	575	同上。
旭有機材工業株式会社	2,458	575	同上。

株式会社十八銀行	1,486	533	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社	145	515	同上。
株式会社三井住友フィナンシャルグループ	118	480	同上。
センコー株式会社	656	470	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社山形銀行	905	438	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社大和証券グループ本社	550	372	同上。
株式会社佐賀銀行	1,221	372	同上。
ライト工業株式会社	264	299	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社大分銀行	601	261	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
電源開発株式会社	100	260	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
ヤマエ久野株式会社	217	247	同上。
野村ホールディングス株式会社	301	208	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社Misumi	104	184	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社宮崎太陽銀行	1,064	181	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
第一稀元素化学工業株式会社	30	168	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。

(みなし保有株式)

該当ありません。

(当事業年度)

貸借対照表計上額が資本金額の100分の1を超える銘柄は次のとおりであります。

(特定投資株式)

銘柄	株式数 (千株)	貸借対照表 計上額(百万円)	保有目的
旭化成株式会社	4,850	6,785	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社九州フィナンシャルグループ	6,212	3,267	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社ふくおかフィナンシャルグループ	4,230	2,423	同上。
九州電力株式会社	1,504	1,908	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
東京海上ホールディングス株式会社	300	1,420	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社九電工	192	1,004	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社ハンズマン	701	996	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割をもつ同社との関係維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
旭有機材工業株式会社	491	860	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
住友不動産株式会社	217	853	同上。
総合メディカル株式会社	274	831	同上。
株式会社武蔵野銀行	215	723	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
西部瓦斯株式会社	243	670	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社淀川製鋼所	230	659	同上。
SOMPOホールディングス株式会社	150	643	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
センコーホールディングス株式会社	656	543	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社三井住友フィナンシャルグループ	118	529	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社	145	488	同上。
株式会社山形銀行	181	426	同上。
株式会社十八銀行	1,486	405	同上。

株式会社大和証券グループ本社	550	373	同上。
WASHハウス株式会社	160	359	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割をもつ同社との関係維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
ライト工業株式会社	264	290	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社佐賀銀行	122	284	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
ヤマエ久野株式会社	217	274	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
電源開発株行会社	100	268	同上。
株式会社大分銀行	60	235	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社Misumi	104	225	取引関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
第一稀元素化学工業株式会社	150	187	同上。
野村ホールディングス株式会社	301	185	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた当行の中長期的な企業価値向上に資するため。
株式会社宮崎太陽銀行	106	178	同上。
株式会社筑波銀行	458	160	同上。

(みなし保有株式)
該当ありません。

八．保有目的が純投資目的である投資株式の貸借対照表計上額、受取配当金、売却損益及び評価損益

	前事業年度			
	貸借対照表計上額 (百万円)	受取配当金 (百万円)	売却損益 (百万円)	評価損益 (百万円)
上場株式	24,039	694	398	1,686
非上場株式				

	当事業年度			
	貸借対照表計上額 (百万円)	受取配当金 (百万円)	売却損益 (百万円)	評価損益 (百万円)
上場株式	22,372	717	2,086	2,747
非上場株式				

二．当事業年度中に投資株式のうち、保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの
該当ありません。

ホ．当事業年度中に投資株式のうち、保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの
該当ありません。

取締役の定数

当行の取締役は18名以内とする旨を定款で定めております。また、当行の取締役のうち監査等委員である取締役は、3名以上とし、その過半数は社外取締役とする旨を定款で定めております。

取締役の選任及び解任の決議要件

当行の取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、累積投票によらない旨を定款で定めております。

取締役会で決議できる株主総会決議事項

当行は、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議によって会社法459条第1項各号に掲げる事項を定めることができる旨を定款で定めております。これは、機動的な剰余金の配当等を可能とすることを目的とするものであります。

なお、当行の期末配当の基準日は毎年3月31日、中間配当の基準日は9月30日とする旨を定款で定めているほか、基準日を定めて剰余金の配当をすることができる旨を定款で定めております。これは、株主への安定的な利益還元を目的とするものであります。

特別決議の要件

会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	52	1	53	0
連結子会社				
計	52	1	53	0

(注) 当行と会計監査人との間の監査契約においては、会社法上の監査に対する報酬等の額と金融商品取引法上の監査に対する報酬等の額を区分しておらず、実質的にも区分できないことから、上記の金額はこれらの合計額を記載しております。

【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度および当連結会計年度ともに、システムに係る委託業務に関するものであります。

【監査報酬の決定方針】

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

- 1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」（昭和57年大蔵省令第10号）に準拠しております。
- 2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」（昭和57年大蔵省令第10号）に準拠しております。
- 3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）の連結財務諸表及び事業年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツの監査証明を受けております。
- 4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、また、監査法人等が主催する研修会への参加並びに会計専門書の定期購読等を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
現金預け金	7 311,177	7 272,941
コールローン及び買入手形	700	1,066
買入金銭債権	133	93
金銭の信託	11,000	13,000
有価証券	1, 7, 14 766,082	1, 7, 14 685,326
貸出金	2, 3, 4, 5, 6, 8 1,841,788	2, 3, 4, 5, 6, 8 1,930,172
外国為替	6 2,231	6 2,667
リース債権及びリース投資資産	7 9,133	10,455
その他資産	7 17,208	7 30,004
有形固定資産	10, 11 24,009	10, 11 23,704
建物	8,111	8,075
土地	9 13,791	9 13,695
建設仮勘定	368	62
その他の有形固定資産	1,737	1,871
無形固定資産	2,082	2,212
ソフトウェア	1,998	2,106
その他の無形固定資産	83	105
繰延税金資産	528	735
支払承諾見返	2,433	2,894
貸倒引当金	9,913	8,729
投資損失引当金	0	0
資産の部合計	2,978,596	2,966,545
負債の部		
預金	7 2,224,498	7 2,357,240
譲渡性預金	169,322	129,968
コールマネー及び売渡手形	145,574	39,561
債券貸借取引受入担保金	7 149,274	7 141,059
借入金	7, 12 110,666	7, 12 112,837
外国為替	12	10
社債	13 15,000	13 15,000
その他負債	10,763	9,687
役員賞与引当金	40	40
退職給付に係る負債	9,084	9,109
睡眠預金払戻損失引当金	269	273
偶発損失引当金	102	108
再評価に係る繰延税金負債	9 2,304	9 2,301
支払承諾	2,433	2,894
負債の部合計	2,839,346	2,820,092
純資産の部		
資本金	14,697	14,697
資本剰余金	12,820	12,820
利益剰余金	94,693	101,915
自己株式	1,292	1,303
株主資本合計	120,918	128,129
その他有価証券評価差額金	18,484	18,148
土地再評価差額金	9 3,045	9 3,044
退職給付に係る調整累計額	3,514	3,243
その他の包括利益累計額合計	18,016	17,949
新株予約権	136	183
非支配株主持分	178	190
純資産の部合計	139,250	146,453
負債及び純資産の部合計	2,978,596	2,966,545

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
経常収益	52,255	54,222
資金運用収益	33,834	34,135
貸出金利息	25,093	25,196
有価証券利息配当金	8,628	8,822
コールローン利息及び買入手形利息	8	15
預け金利息	9	4
その他の受入利息	94	95
役務取引等収益	8,002	8,190
その他業務収益	7,504	8,486
その他経常収益	2,914	3,410
貸倒引当金戻入益	602	31
償却債権取立益	201	141
その他の経常収益	2,110	3,237
経常費用	39,397	41,328
資金調達費用	1,718	1,715
預金利息	355	303
譲渡性預金利息	122	62
コールマネー利息及び売渡手形利息	148	275
債券貸借取引支払利息	369	401
借入金利息	70	69
社債利息	132	131
その他の支払利息	520	470
役務取引等費用	4,224	4,334
その他業務費用	6,450	8,452
営業経費	26,306	26,076
その他経常費用	697	748
その他の経常費用	1 697	1 748
経常利益	12,858	12,894
特別利益	20	370
固定資産処分益	20	366
その他の特別利益	-	3
特別損失	231	547
固定資産処分損	88	80
固定資産圧縮損	-	359
減損損失	2 142	2 106
税金等調整前当期純利益	12,648	12,717
法人税、住民税及び事業税	4,365	4,103
法人税等調整額	451	168
法人税等合計	3,913	3,935
当期純利益	8,734	8,782
非支配株主に帰属する当期純利益 又は非支配株主に帰属する当期純損失()	521	12
親会社株主に帰属する当期純利益	9,255	8,770

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
当期純利益	8,734	8,782
その他の包括利益	1 2,443	1 65
その他有価証券評価差額金	3,291	336
退職給付に係る調整額	848	270
包括利益	6,290	8,716
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	6,812	8,704
非支配株主に係る包括利益	521	12

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	14,697	8,796	87,057	1,694	108,857
当期変動額					
剰余金の配当			1,623		1,623
親会社株主に帰属する当期純利益			9,255		9,255
自己株式の取得				3	3
自己株式の処分		17		405	388
連結子会社に対する持分変動に伴う資本剰余金の増減		4,040			4,040
土地再評価差額金の取崩			3		3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	4,023	7,635	401	12,061
当期末残高	14,697	12,820	94,693	1,292	120,918

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計			
当期首残高	21,776	3,049	4,362	20,463	88	6,596	136,005
当期変動額							
剰余金の配当							1,623
親会社株主に帰属する当期純利益							9,255
自己株式の取得							3
自己株式の処分							388
連結子会社に対する持分変動に伴う資本剰余金の増減							4,040
土地再評価差額金の取崩							3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	3,291	3	848	2,446	48	6,418	8,816
当期変動額合計	3,291	3	848	2,446	48	6,418	3,244
当期末残高	18,484	3,045	3,514	18,016	136	178	139,250

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	14,697	12,820	94,693	1,292	120,918
当期変動額					
剰余金の配当			1,549		1,549
親会社株主に帰属する当期純利益			8,770		8,770
自己株式の取得				11	11
自己株式の処分		0		0	0
土地再評価差額金の取崩			0		0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	0	7,221	11	7,210
当期末残高	14,697	12,820	101,915	1,303	128,129

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計			
当期首残高	18,484	3,045	3,514	18,016	136	178	139,250
当期変動額							
剰余金の配当							1,549
親会社株主に帰属する当期純利益							8,770
自己株式の取得							11
自己株式の処分							0
土地再評価差額金の取崩							0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	336	0	270	66	46	11	7
当期変動額合計	336	0	270	66	46	11	7,202
当期末残高	18,148	3,044	3,243	17,949	183	190	146,453

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	12,648	12,717
減価償却費	1,963	1,864
減損損失	142	106
貸倒引当金の増減()	1,122	1,183
投資損失引当金の増減額(は減少)	0	0
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	452	414
退職給付信託の設定額	6,000	-
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	12	-
睡眠預金払戻損失引当金の増減()	84	4
偶発損失引当金の増減額(は減少)	32	6
資金運用収益	33,834	34,135
資金調達費用	1,718	1,715
有価証券関係損益()	1,427	644
金銭の信託の運用損益(は運用益)	75	-
為替差損益(は益)	40	538
固定資産処分損益(は益)	65	286
その他の特別損益(は益)	-	3
固定資産圧縮損	-	359
貸出金の純増()減	78,994	88,728
預金の純増減()	85,742	132,951
譲渡性預金の純増減()	11,143	39,354
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減()	19,805	2,171
預け金(日銀預け金を除く)の純増()減	13	219
コールローン等の純増()減	304	360
コールマネー等の純増減()	77,904	104,805
債券貸借取引受入担保金の純増減()	38,306	6,769
外国為替(資産)の純増()減	9	511
外国為替(負債)の純増減()	2	1
資金運用による収入	34,522	34,779
資金調達による支出	1,787	1,779
その他	791	15,977
小計	139,327	106,689
法人税等の支払額	3,967	3,305
営業活動によるキャッシュ・フロー	135,360	109,994
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	153,970	183,111
有価証券の売却による収入	79,224	179,996
有価証券の償還による収入	72,157	80,474
金銭の信託の増加による支出	3,075	2,000
有形固定資産の取得による支出	1,308	1,421
有形固定資産の売却による収入	61	408
無形固定資産の取得による支出	565	805
投資活動によるキャッシュ・フロー	7,475	73,539
財務活動によるキャッシュ・フロー		
配当金の支払額	1,623	1,549
非支配株主への配当金の支払額	3	0
自己株式の取得による支出	3	11
自己株式の売却による収入	17	0
子会社の自己株式の取得による支出	715	-
連結の範囲の変更を伴わない 子会社株式の取得による支出	748	-
財務活動によるキャッシュ・フロー	3,077	1,560
現金及び現金同等物に係る換算差額	1	0
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	124,805	38,016
現金及び現金同等物の期首残高	176,977	301,783
現金及び現金同等物の期末残高	1 301,783	1 263,766

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 6社

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。

(2) 非連結子会社 5社

株式会社夢逢いファーム

みやぎん6次産業化投資事業有限責任組合

みやぎん地方創生1号ファンド投資事業有限責任組合

みやぎん宮崎大学夢応援投資事業有限責任組合

みやぎん女性起業家支援投資事業有限責任組合

非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

(2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

(3) 持分法非適用の非連結子会社 5社

株式会社夢逢いファーム

みやぎん6次産業化投資事業有限責任組合

みやぎん地方創生1号ファンド投資事業有限責任組合

みやぎん宮崎大学夢応援投資事業有限責任組合

みやぎん女性起業家支援投資事業有限責任組合

(4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除外しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、いずれも3月末日であります。

4 会計方針に関する事項

(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

(イ)有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、持分法非適用の非連結子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(ロ)有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

当行の有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 5年~50年

その他 3年~20年

連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定額法により償却しております。

無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のは零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は2,018百万円(前連結会計年度末は1,066百万円)であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

- (6) 投資損失引当金の計上基準
投資損失引当金は、投資に対する損失に備えるため、有価証券の発行会社の財政状態等を勘案して必要と認められる額を計上しております。
- (7) 役員賞与引当金の計上基準
役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。
- (8) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準
睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。
- (9) 偶発損失引当金の計上基準
偶発損失引当金は、信用保証協会との責任共有制度において、信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。
- (10) 退職給付に係る会計処理の方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。
過去勤務費用
その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理
数理計算上の差異
各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から損益処理
なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。
- (11) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
当行の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。
連結子会社の外貨建資産・負債はありません。
- (12) 重要なヘッジ会計の方法
当行の金融資産・負債から生じる金利リスクをヘッジする目的で金利スワップ取引を利用しております。
なお、金利スワップ取引で特例処理の適用要件を満たすものについては、金利スワップの特例処理を適用しております。
連結子会社は、ヘッジ取引を行っておりません。
- (13) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。
- (14) 消費税等の会計処理
消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
- (15) ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準
リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(連結貸借対照表関係)

1. 非連結子会社の株式又は出資金の総額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
株式	百万円	50百万円
出資金	815百万円	1,519百万円

2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
破綻先債権額	190百万円	304百万円
延滞債権額	24,032百万円	21,543百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額はありませぬ。

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で、破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
貸出条件緩和債権額	7,016百万円	9,963百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
合計額	31,239百万円	31,810百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	6,948百万円	7,662百万円

7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
担保に供している資産		
預け金	40百万円	39百万円
有価証券	298,420 "	288,785 "
リース投資資産	708 "	"
その他資産	14 "	"
計	299,183 "	288,824 "
担保資産に対応する債務		
預金	9,547 "	9,585 "
債券貸借取引受入担保金	149,274 "	141,059 "
借入金	103,594 "	100,000 "

なお、上記のリース投資資産は、利息相当額を含んでおります。

上記のほか、為替決済及びデリバティブ取引等の担保として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
現金	2,000百万円	15,851百万円
有価証券	19,216百万円	3,032百万円

また、その他資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
保証金	220百万円	219百万円

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
融資未実行残高	455,895百万円	491,955百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消 可能なもの)	452,073百万円	488,836百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

平成10年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額に基づいて、路線価に奥行価格補正等合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	6,470百万円	5,282百万円

10. 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
減価償却累計額	31,098百万円	31,140百万円

11. 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
圧縮記帳額 (当該連結会計年度の圧縮記帳額)	665百万円 (百万円)	1,011百万円 (359百万円)

12. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれておりません。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
劣後特約付借入金	5,000百万円	5,000百万円

13. 社債は、劣後特約付社債であります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
劣後特約付社債	15,000百万円	15,000百万円

14. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	100百万円	280百万円

(連結損益計算書関係)

1. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
貸出金償却	216百万円	313百万円
株式等売却損	104百万円	21百万円
株式等償却	103百万円	239百万円
	円	

2. 前連結会計年度(自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)

店舗移転に伴う資産の遊休化や継続的な地価の下落等により投資額の回収が見込めなくなったことに伴い、以下の資産について帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

(減損損失を認識した資産または資産グループ及び種類ごとの減損損失額)

地 域	主な用途	種 類	減損損失額 (百万円)	うち土地 (百万円)	うち建物 (百万円)
都城地区	営業店舗跡地等	土地、建物	132	107	25
その他	営業店舗跡地等	土地	10	10	
合 計			142	117	25

(資産グループの概要及びグルーピングの方法)

(イ) 資産グループの概要

共用資産

銀行全体に関連する資産(本部、事務センター)、各地区に関連する資産(当該地区の社宅)

営業用資産

営業の用に供する資産

遊休資産

店舗・社宅跡地等

連結子会社

(ロ) グルーピングの方法

共用資産

銀行全体又は各地区を一体としてグルーピング

営業用資産

各地区毎にグルーピング

遊休資産

各々が独立した資産としてグルーピング

連結子会社

個社毎にグルーピング

(回収可能価額)

当連結会計年度の減損損失の測定に使用した回収可能価額は正味売却価額によっており、正味売却価額については、不動産鑑定評価額に基づき算定しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

資産の遊休化や継続的な地価の下落等により投資額の回収が見込めなくなったことに伴い、以下の資産について帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

（減損損失を認識した資産または資産グループ及び種類ごとの減損損失額）

地 域	主な用途	種 類	減損損失額 （百万円）	うち土地 （百万円）	うち建物 （百万円）
日南地区	共同住宅跡地等	土地	8	8	
その他	共同住宅跡地等	土地、建物	97	69	28
合 計			106	78	28

（資産グループの概要及びグルーピングの方法）

（イ）資産グループの概要

共用資産

銀行全体に関連する資産（本部、事務センター）、各地区に関連する資産（当該地区の社宅）

営業用資産

営業の用に供する資産

遊休資産

店舗・社宅跡地等

連結子会社

（ロ）グルーピングの方法

共用資産

銀行全体又は各地区を一体としてグルーピング

営業用資産

各地区毎にグルーピング

遊休資産

各々が独立した資産としてグルーピング

連結子会社

個社毎にグルーピング

（回収可能価額）

当連結会計年度の減損損失の測定に使用した回収可能価額は正味売却価額によっており、正味売却価額については、不動産鑑定評価額に基づき算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	4,005	385
組替調整額	955	883
税効果調整前	4,961	497
税効果額	1,669	161
その他有価証券評価差額金	3,291	336
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	1	862
組替調整額	1,218	1,251
税効果調整前	1,220	389
税効果額	371	118
退職給付に係る調整額	848	270
その他の包括利益合計	2,443	65

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	176,334			176,334	
種類株式					
合計	176,334			176,334	
自己株式					
普通株式	5,472	11	1,312	4,171	(注) 1、2
種類株式					
合計	5,472	11	1,312	4,171	

(注) 1 増加株式数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加 11千株

2 減少株式数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の売渡しによる減少 1千株

株式交換による減少 1,311千株

2 新株予約権に関する事項

区分	新株予約 権の内訳	新株予約 権の目的 となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計 年度末残高 (百万円)	摘要
			当連結会 計年度 期首	当連結会計年度			
				増加	減少		
当行	ス ト ッ ク・オプ ションと しての新 株予約権				136		
合計					136		

3 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年6月24日 定時株主総会	普通株式	854	5.00	平成28年3月31日	平成28年6月27日
平成28年11月9日 取締役会	普通株式	768	4.50	平成28年9月30日	平成28年12月9日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月27日 定時株主総会	普通株式	774	利益剰余金	4.50	平成29年3月31日	平成29年6月28日

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	176,334		158,700	17,633	(注) 1、2
種類株式					
合計	176,334		158,700	17,633	
自己株式					
普通株式	4,171	11	3,763	420	(注) 1、3、4
種類株式					
合計	4,171	11	3,763	420	

(注) 1 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。

2 減少株式数の内訳は、次のとおりであります。

株式併合による減少 158,700千株

3 増加株式数の内訳は、次のとおりであります。

株式併合前に行った単元未満株式の買取りによる増加 9千株

株式併合後に行った単元未満株式の買取りによる増加 0千株

株式併合に伴う端数株式の買取りによる増加 0千株

4 減少株式数の内訳は次のとおりであります。

株式併合前に行った単元未満株式の売渡しによる減少 0千株

株式併合後に行った単元未満株式の売渡しによる減少 0千株

株式併合による減少 3,763千株

株式併合に伴う端数株式の処分による減少 0千株

2 新株予約権に関する事項

区分	新株予約 権の内訳	新株予約 権の目的 となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計 年度末残高 (百万円)	摘要
			当連結会 計年度 期首	当連結会計年度			
			増加	減少			
当行	ス ト ッ ク・オプ ションと しての新 株予約権					183	
合計						183	

3 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月27日 定時株主総会	普通株式	774	4.50	平成29年3月31日	平成29年6月28日
平成29年11月10日 取締役会	普通株式	774	4.50	平成29年9月30日	平成29年12月8日

(注) 1株当たり配当額については、基準日が平成29年9月30日であるため、平成29年10月1日付の株式併合の影響は加味しておりません。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成30年6月26日 定時株主総会	普通株式	774	利益剰余金	45.00	平成30年3月31日	平成30年6月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
現金預け金勘定	311,177百万円	272,941百万円
当座預け金	231 "	127 "
普通預け金	121 "	6 "
定期預け金	9,040 "	9,040 "
現金及び現金同等物	301,783 "	263,766 "

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

借手側

該当ありません。

貸手側

貸手としてのリース取引に重要性が乏しいため、リース投資資産についての記載を省略しております。

2. オペレーティング・リース取引

借手側

該当ありません。

貸手側

該当ありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業務を中心に、リース業務、信用保証業務及びクレジットカード業務等の金融サービスに係る業務を行っております。これらの業務は、市場の状況や長短のバランスを調整しながら、預金を中心とした資金調達、貸出及び有価証券投資を中心とした資金運用により行っております。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、当行では資産及び負債の総合的管理を行っております。また、当行におけるデリバティブ取引は、主として貸出金にかかる金利変動リスク、外国為替取引における為替変動リスク等のリスクを回避（ヘッジ）するため、通常業務の一環として行っております。また、一部の資産・負債については、金利スワップの特例処理を適用しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先に対する貸出金であり、貸出金は取引先等の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。特に、当行は宮崎県内を営業基盤としており、貸出金の8割超が宮崎県内等地元向けとなっております。したがって、大規模な地震や台風等の自然災害が発生した場合や、宮崎県内等地域の経済環境等の状況の変化により、取引先の経営状況が悪化し、契約条件に従った債務履行がなされない可能性があります。また当行の預金金利、貸出金利は市場金利に基づき改定しておりますが、市場金利の変化の速度や度合いによっては、預金金利、貸出金利改定のタイムラグや当行の資産（貸出等）・負債（預金等）の各科目の市場金利に対する金利感応度（弾性値）の差異等により資金利益が悪化する可能性があります。

有価証券は、主に債券、株式及び投資信託等であり、資産運用のための投資を主な目的として保有しております。これらは、それぞれの発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスク等の他に、市場の混乱等により市場において取引ができなくなることや、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされる可能性があります。

一方、金融負債の中心である預金につきましては、当行は健全経営を堅持しておりますが、万が一何らかの要因により、当行の経営が不安視され風評等が発生すると、預金流出し、資金繰りに支障をきたす可能性があります。

コールマネー、借入金、社債は、当行の財務内容の悪化等により必要な資金が確保できなくなることや、通常よりも著しく高い金利での資金調達が余儀なくされること等の流動性リスクに晒されております。

当行におけるデリバティブ取引は、金利関連では金利スワップ取引、通貨関連では為替予約取引及び通貨スワップ取引、債券関連では債券先物及び債券先物オプション取引等であります。なお、デリバティブ取引については、当行のみが行っており、連結子会社では行っておりません。デリバティブ取引の主なリスクは、市場リスク及び信用リスクであります。市場リスクは、金利や価格が変動することにより保有しているデリバティブの価値が減少するリスクのことで、ヘッジ目的の取引が大部分となっているため、オンバランス取引と合わせた総合的な市場リスクは非常に限られたものとなっております。また、信用リスクは、相手方が契約不履行となった場合に損失を被るリスクのことで、取引の契約先をいずれも取引所や信用度の高い金融機関としており、取引先別にクレジットラインを設定し厳格に管理しているため、信用リスクは小さいと認識しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当行グループは、「内部管理基本方針」及び「リスク管理基本方針」に沿って定めた「信用リスク管理規程」に基づき、リスクの分散を基本とする最適な与信ポートフォリオの構築や、融資審査モラルの維持向上を目指すことにより、貸出資産の健全性維持に努めております。また、「信用格付」、「自己査定」を通じた信用供与に係るリスク量を客観的かつ定量的に把握するため、「信用リスクの定量化」に取り組んでおります。

なお、ポートフォリオの状況や、信用リスク量の計測結果については、関係部の部長による部会組織である「信用リスク専門部会」にて定期的に評価を実施し、その結果を経営陣による意思決定機関である「リスク管理委員会」へ報告しております。

連結子会社におきましては、「グループ会社リスク管理規程」を整備して対応しております。また、それぞれの連結子会社にかかるリスク管理の状況に関しては当行でリスク認識・把握・評価を行い、「リスク管理委員会」へ定期的に報告を行う体制となっております。

市場リスクの管理

デリバティブなどの金融技術の発展を背景にますます多様化する取引先のニーズに適切に対処し、経営の健全性及び収益の安定確保を目的に、関連法規、市場慣行に基づき、取引の妥当性、市場リスクを適切に把握し、許容し得る限度内での効率的な資金の調達・資産の最適配分を図ることを基本方針としております。具体的にはALM委員会において、金利リスク、価格変動リスク等のコントロールを実施しております。

市場リスクを適切にコントロールするため、ALM委員会において、半期毎に自己資本額を基準として、市場リスクの限度額及び市場関連リスク額の警戒水準であるアラームポイントを設定し、管理を行っております。所管部署は、これらのリスクリミットルールに基づき、機動的かつ効率的に市場取引を行っております。

このように市場取引の多様化・複雑化に適切に対応するとともに、自己資本比率規制で実施されているアウトライヤー基準と呼ばれる金利リスクの限度管理に対応するため、バンキング勘定についても金利リスク量の計測を定期的実施し、将来の金利変動に対する厳格なリスク管理を行っております。

連結子会社におきましては、「グループ会社リスク管理規程」を整備して対応しております。また、それぞれの連結子会社にかかるリスク管理の状況に関しては当行でリスク認識・把握・評価を行い、「リスク管理委員会」へ定期的に報告を行う体制となっております。

() 市場リスクに係る定量的情報

当行において、主要なリスク変数である金利変動の影響を受ける主たる金融商品は、「貸出金」、「債券」、「預金」、「長期借入金」、「社債」、「金利関連デリバティブ取引」等であります。また、株式の価格変動の影響を受ける金融商品は「株式」、「株式投資信託」であります。

当行では、これらの金融資産及び金融負債の市場リスクについて、aR（バリュアットリスク）計測による、金利の変動リスク及び株式の価格変動リスクの定量的分析を実施しております。VaRの計測にあたっては、分散共分散法〔保有期間6ヶ月、信頼区間99%、観測期間240営業日〕を採用しており、リスクカテゴリー間の相関を考慮して算出しております。また、バンキング勘定のうちコア預金（明確な金利改定間隔がなく、預金者の要求において随時払い出される預金のうち引き出されることなく長期間滞留する預金）は、内部モデルにて残存年数等を算定しております。

平成30年3月31日（当期の連結決算日）現在、当行の金利リスクは4,700百万円、価格変動リスクは18,126百万円であり、市場リスク全体の相関を考慮したリスク量の合計は19,684百万円となっております。

なお、aRの計測値については、バックテストによる検証を定期的実施しておりますが、過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下においては、リスクを捕捉できない場合があります。また、影響が軽微な一部の金融商品や連結子会社の金融商品につきましては、定量的分析を実施しておりません。

流動性リスクの管理

流動性リスクについては、ALM委員会において、その時点での市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（（注2）参照）。

また、「リース債権及びリース投資資産」等、重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	311,177	311,177	
(2) コールローン及び買入手形	700	700	
(3) 有価証券 満期保有目的の債券 その他有価証券	762,052	762,052	
(4) 貸出金 貸倒引当金（*1）	1,841,788 9,173		
	1,832,614	1,834,309	1,694
資産計	2,906,545	2,908,240	1,694
(1) 預金	2,224,498	2,224,516	18
(2) 譲渡性預金	169,322	169,330	8
(3) コールマネー及び売渡手形	145,574	145,574	
(4) 債券貸借取引受入担保金	149,274	149,274	
(5) 借入金	110,666	110,376	289
(6) 社債	15,000	14,795	204
負債計	2,814,336	2,813,869	467
デリバティブ取引（*2） ヘッジ会計が適用されていないもの	222	222	
ヘッジ会計が適用されているもの		(2,590)	(2,590)
デリバティブ取引計	222	(2,368)	(2,590)

（*1） 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

（*2） その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で表示しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	272,941	272,941	
(2) コールローン及び買入手形	1,066	1,066	
(3) 有価証券 満期保有目的の債券 その他有価証券	680,648	680,648	
(4) 貸出金 貸倒引当金（*1）	1,930,172 8,154		
	1,922,017	1,929,107	7,090
資産計	2,876,673	2,883,764	7,090
(1) 預金	2,357,240	2,357,291	51
(2) 譲渡性預金	129,968	129,968	0
(3) コールマネー及び売渡手形	39,561	39,561	
(4) 債券貸借取引受入担保金	141,059	141,059	
(5) 借入金	112,837	112,484	353
(6) 社債	15,000	15,029	29
負債計	2,795,667	2,795,396	271
デリバティブ取引（*2） ヘッジ会計が適用されていないもの	414	414	
ヘッジ会計が適用されているもの		(2,232)	(2,232)
デリバティブ取引計	414	(1,817)	(2,232)

（*1） 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

（*2） その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

(1) 現金預け金

預け金については、満期の無いもの又は残存期間が短期間であり、時価が帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) コールローン及び買入手形

これらは、残存期間が短期間(3カ月以内)であり、時価が帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、発行体の外部格付がないため、貸出金と同一の方法により、発行体の内部格付及び期間等を勘案して時価を算定しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については「(有価証券関係)」に記載しております。

(4) 貸出金

貸出金のうち、残存期間が短期間(3カ月以内)のものは、時価が帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。また、残存期間が3カ月を超えるものは、貸出金の商品種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見積額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当座貸越等、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負 債

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金及び譲渡性預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(3カ月以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) コールマネー及び売渡手形

これらは、残存期間が短期間(3カ月以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(4) 債券貸借取引受入担保金

債券貸借取引受入担保金については、残存期間が短期間であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(5) 借入金

借入金については、一定の期間ごとに区分した当該借入金の元利金の合計額を、同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。

(6) 社債

発行する社債の時価は、市場価格によっております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(3)其他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区 分	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
非上場株式(*1)(*2)	1,129	1,142
組合出資金(*3)(*4)	2,899	3,535
合 計	4,029	4,678

- (*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。
- (*2) 前連結会計年度において、非上場株式について5百万円減損処理を行っております。当連結会計年度において、非上場株式について79百万円減損処理を行っております。
- (*3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。
- (*4) 前連結会計年度において、組合出資金について98百万円減損処理を行っております。当連結会計年度において、組合出資金について159百万円減損処理を行っております。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	281,177					
コールローン及び買入手形	700					
有価証券	67,065	181,138	200,050	90,734	121,914	40,965
満期保有目的の債券						
其他有価証券のうち 満期があるもの	67,065	181,138	200,050	90,734	121,914	40,965
うち国債	27,600	84,137	96,631	29,368	38,319	25,517
地方債	12,885	46,122	38,146	9,053	20,339	13,851
社債	16,804	28,774	40,683	21,660	14,226	
貸出金(*)	399,130	265,025	234,069	173,533	216,001	530,014
合 計	748,074	446,163	434,120	264,267	337,915	570,979

- (*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない24,014百万円は含めておりません。また、当座貸越については、「1年以内」に含めて記載しております。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	242,449					
コールローン及び買入手形	1,066					
有価証券	64,490	232,907	144,931	49,257	108,943	17,585
満期保有目的の債券						
其他有価証券のうち 満期があるもの	64,490	232,907	144,931	49,257	108,943	17,585
うち国債	24,532	114,588	63,506	16,657	29,884	
地方債	15,487	55,253	18,666	10,198	33,271	13,918
社債	11,415	40,914	25,358	13,292	10,301	
貸出金(*)	426,081	297,145	222,824	175,464	209,379	577,600
合 計	734,088	530,053	367,756	224,721	318,323	595,186

- (*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない21,675百万円は含めておりません。また、当座貸越については、「1年以内」に含めて記載しております。

(注4) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(平成29年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	2,103,640	112,707	8,150			
譲渡性預金	169,322					
コールマネー及び売渡手形	145,574					
債券貸借取引受入担保金	149,274					
借入金	2,224	7,531	100,868	40		
社債				15,000		
合計	2,570,037	120,239	109,019	15,040		

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて記載しております。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	2,230,506	114,583	12,149			
譲渡性預金	129,968					
コールマネー及び売渡手形	39,561					
債券貸借取引受入担保金	141,059					
借入金	7,822	3,433	101,581			
社債	15,000					
合計	2,563,918	118,017	113,731			

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて記載しております。

(有価証券関係)

- 1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「買入金銭債権」中の信託受益権を含めて記載しております。
- 2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1. 売買目的有価証券

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額		

2. 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成29年3月31日現在)

	種 類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時 価 (百万円)	差 額 (百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国 債			
	地 方 債			
	社 債			
	そ の 他	133	136	2
	小 計	133	136	2
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国 債			
	地 方 債			
	社 債			
	そ の 他			
	小 計			
合 計		133	136	2

当連結会計年度(平成30年3月31日現在)

	種 類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時 価 (百万円)	差 額 (百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国 債			
	地 方 債			
	社 債			
	そ の 他	93	95	1
	小 計	93	95	1
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国 債			
	地 方 債			
	社 債			
	そ の 他			
	小 計			
合 計		93	95	1

3. その他有価証券

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	種 類	連結貸借対照表 計上額（百万円）	取得原価 （百万円）	差 額 （百万円）
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	株 式	39,349	24,713	14,635
	債 券	501,510	487,732	13,778
	国 債	282,994	274,589	8,404
	地 方 債	103,472	101,160	2,312
	社 債	115,043	111,982	3,060
	そ の 他	68,058	65,588	2,470
	小 計	608,918	578,034	30,884
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	株 式	12,659	13,755	1,096
	債 券	62,611	63,803	1,191
	国 債	18,578	19,162	583
	地 方 債	36,926	37,496	570
	社 債	7,106	7,144	38
	そ の 他	77,862	80,310	2,447
	小 計	153,134	157,869	4,735
合 計		762,052	735,904	26,148

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	種 類	連結貸借対照表 計上額（百万円）	取得原価 （百万円）	差 額 （百万円）
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	株 式	41,461	23,968	17,493
	債 券	463,415	453,794	9,620
	国 債	249,168	243,480	5,687
	地 方 債	117,306	115,614	1,692
	社 債	96,940	94,699	2,240
	そ の 他	44,258	41,726	2,532
	小 計	549,135	519,489	29,646
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	株 式	10,456	11,772	1,316
	債 券	33,831	34,245	414
	国 債			
	地 方 債	29,488	29,882	394
	社 債	4,343	4,362	19
	そ の 他	87,224	89,489	2,265
	小 計	131,512	135,508	3,995
合 計		680,648	654,997	25,650

4. 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当ありません。

5. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

種 類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株 式	12,493	780	104
債 券	19,451	11	286
国 債	19,451	11	286
地 方 債			
社 債			
そ の 他	47,754	1,558	752
合 計	79,699	2,351	1,143

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

種 類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株 式	20,849	2,146	21
債 券	91,532	1,467	445
国 債	33,795	749	414
地 方 債	52,915	697	30
社 債	4,821	20	
そ の 他	67,980	288	1,773
合 計	180,362	3,902	2,239

6. 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

7. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券（時価を把握することが極めて困難なものを除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理（以下、「減損処理」という。）しております。

前連結会計年度及び当連結会計年度において減損処理を行った有価証券はありません。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、時価が取得価額に比べて30%以上下落した場合であります。

(金銭の信託関係)

1. 運用目的の金銭の信託

前連結会計年度(平成29年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	11,000	

当連結会計年度(平成30年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	13,000	

2. 満期保有目的の金銭の信託

該当ありません。

3. その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

該当ありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(平成29年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	26,148
その他有価証券	26,148
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	7,663
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	18,484
()非支配株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	18,484

当連結会計年度(平成30年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	25,650
その他有価証券	25,650
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	7,502
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	18,148
()非支配株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	18,148

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(平成29年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	金利先物 金利オプション				
店頭	金利先渡契約 金利スワップ 受取固定・支払変動 受取変動・支払固定 受取変動・支払変動 金利オプション その他	36,579	35,883	6	6
	合計			6	6

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。
2. 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	金利先物 金利オプション				
店頭	金利先渡契約 金利スワップ 受取固定・支払変動 受取変動・支払固定 受取変動・支払変動 金利オプション その他	34,407	34,407	74	74
	合計			74	74

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。
2. 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(平成29年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物 通貨オプション				
店頭	通貨スワップ 為替予約 売建 買建 通貨オプション その他	2,269 14,664 294		28 187 0	28 187 0
	合計			215	215

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。
2. 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物 通貨オプション				
店頭	通貨スワップ 為替予約	2,152		24	24
	売建	14,021		464	464
	買建	267		0	0
	通貨オプション その他				
	合計			488	488

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。
2. 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

該当ありません。

(4) 債券関連取引

該当ありません。

(5) 商品関連取引

該当ありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引

該当ありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度（平成29年3月31日現在）

ヘッジ会計 の方法	種類	主なヘッジ 対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップ の特例処理	金利スワップ 受取変動・支払固定	貸出金	38,635	38,147	2,590
	合計				2,590

(注) 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日現在）

ヘッジ会計 の方法	種類	主なヘッジ 対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップ の特例処理	金利スワップ 受取変動・支払固定	貸出金	33,652	32,286	2,232
	合計				2,232

(注) 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

(2) 通貨関連取引
該当ありません。

(3) 株式関連取引
該当ありません。

(4) 債券関連取引
該当ありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付型の制度として、企業年金基金制度及び退職一時金制度を設けております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。

なお、退職一時金制度には退職給付信託が設定されております。

退職一時金制度（非積立型制度ですが、退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっているものがあります。）では、退職給付として給与と勤務期間に基づいた一時金を支給します。

連結子会社は、確定給付型の制度として、退職一時金制度を設けております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付債務の期首残高	30,319	30,052
勤務費用	938	922
利息費用	151	179
数理計算上の差異の発生額	149	925
退職給付の支払額	1,230	1,254
過去勤務費用の発生額	23	
その他		
退職給付債務の期末残高	30,052	30,825

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
年金資産の期首残高	14,467	20,968
期待運用収益	349	419
数理計算上の差異の発生額	123	62
事業主からの拠出額	878	880
退職給付の支払額	603	614
退職給付信託設定額	6,000	
その他		
年金資産の期末残高	20,968	21,716

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	29,944	30,702
年金資産	20,968	21,716
非積立型制度の退職給付債務	8,976 108	8,985 123
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	9,084	9,109

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付に係る負債	9,084	9,109
退職給付に係る資産		
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	9,084	9,109

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
勤務費用	938	922
利息費用	151	179
期待運用収益	349	419
数理計算上の差異の費用処理額	1,216	1,249
過去勤務費用の費用処理額	1	2
その他	28	32
確定給付制度に係る退職給付費用	1,986	1,966

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
過去勤務費用	22	2
数理計算上の差異	1,242	387
その他		
合計	1,220	389

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
未認識過去勤務費用	22	20
未認識数理計算上の差異	5,033	4,646
その他		
合計	5,055	4,666

(7) 年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
債券	38.4%	40.3%
株式	20.0%	18.6%
その他	41.6%	41.1%
合計	100.0%	100.0%

(注) 年金資産合計額には平成28年度に退職給付一時金制度に対し設定した退職給付信託が27.9%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表しております。)

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
割引率	0.6%	0.4%
長期期待運用収益率	2.0%	2.0%
予想昇給率	1.4%	1.4%

3. 確定拠出制度

該当ありません。

(ストック・オプション等関係)

1. スtock・オプションにかかる費用計上額および科目名

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業経費	48百万円	46百万円

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

(注) 1 「株式の種類別のストック・オプションの数」は株式数に換算して記載しております。

2 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。これにより、「株式の種類別のストック・オプションの数」が調整されております。

平成25年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 8名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注) 1、2	当行普通株式 15,160株
付与日	平成25年7月31日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	平成25年8月1日から 平成55年7月31日まで

平成26年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 8名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注) 1、2	当行普通株式 12,350株
付与日	平成26年7月31日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	平成26年8月1日から 平成56年7月31日まで

平成27年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 9名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注) 1、2	当行普通株式 10,660株
付与日	平成27年7月31日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	平成27年8月1日から 平成57年7月31日まで

平成28年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 9名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注) 1、2	当行普通株式 19,480株
付与日	平成28年7月29日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	平成28年7月30日から 平成58年7月29日まで

	平成29年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 9名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注)1、2	当行普通株式 13,000株
付与日	平成29年7月31日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	平成29年8月1日から 平成59年7月31日まで

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(平成30年3月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

ストック・オプションの数

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。これにより、ストック・オプションの数を換算した株式数が調整されております。

	平成25年ストック・オプション
権利確定前(株)	
前連結会計年度末	
付与	
失効	
権利確定	
未確定残	
権利確定後(株)	
前連結会計年度末	9,510
権利確定	
権利行使	
失効	
未行使残	9,510

	平成26年ストック・オプション
権利確定前(株)	
前連結会計年度末	
付与	
失効	
権利確定	
未確定残	
権利確定後(株)	
前連結会計年度末	10,550
権利確定	
権利行使	
失効	
未行使残	10,550

平成27年ストック・オプション	
権利確定前（株）	
前連結会計年度末	
付与	
失効	
権利確定	
未確定残	
権利確定後（株）	
前連結会計年度末	10,660
権利確定	
権利行使	
失効	
未行使残	10,660

平成28年ストック・オプション	
権利確定前（株）	
前連結会計年度末	19,480
付与	
失効	
権利確定	19,480
未確定残	
権利確定後（株）	
前連結会計年度末	
権利確定	19,480
権利行使	
失効	
未行使残	19,480

平成29年ストック・オプション	
権利確定前（株）	
前連結会計年度末	
付与	13,000
失効	
権利確定	
未確定残	13,000
権利確定後（株）	
前連結会計年度末	
権利確定	
権利行使	
失効	
未行使残	

単価情報

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。これにより、「付与日における公正な評価単価」が調整されております。

平成25年ストック・オプション	
権利行使価格	1株当たり1円
行使時平均株価	
付与日における公正な評価単価	1株当たり2,630円

平成26年ストック・オプション	
権利行使価格	1株当たり1円
行使時平均株価	
付与日における公正な評価単価	1株当たり3,260円

平成27年ストック・オプション	
権利行使価格	1株当たり1円
行使時平均株価	
付与日における公正な評価単価	1株当たり3,620円

平成28年ストック・オプション	
権利行使価格	1株当たり1円
行使時平均株価	
付与日における公正な評価単価	1株当たり2,640円

平成29年ストック・オプション	
権利行使価格	1株当たり1円
行使時平均株価	
付与日における公正な評価単価	1株当たり3,500円

3. スtock・オプションの公正な評価単価の見積方法

(1) 使用した評価技法 ブラック・ショールズ方式

(2) 主な基礎数値及びその見積方法

株価変動性(注1)	36.255%
予想残存期間(注2)	2年
予想配当(注3)	1株当たり 9円
無リスク利率(注4)	0.120%

(注) 1 予想残存期間に対する期間(平成27年7月31日から平成29年7月31日までの日次)の株価実績に基づき算定しております。

2 付与日から権利行使されると見込まれる平均的な時期までの期間により見積りしております。

3 平成29年3月実績によります。

4 予想残存期間に対応する国債の利回りであります。

4. スtock・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	3,132 百万円	3,072 百万円
退職給付に係る負債	2,772	2,777
減価償却費	633	580
有価証券	977	978
退職給付信託設定額	1,824	1,851
その他	1,121	1,194
繰延税金資産小計	10,462	10,455
評価性引当額	2,258	2,185
繰延税金資産合計	8,204	8,269
繰延税金負債		
其他有価証券評価差額金	7,663	7,502
その他	11	31
繰延税金負債合計	7,675	7,533
繰延税金資産(負債)の純額	528 百万円	735 百万円

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

前連結会計年度及び当連結会計年度ともに、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

店舗用土地または建物の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務や、法令に基づくアスベスト除去の義務等であります。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

建物の構造により、使用見込期間は取得から34～39年と見積もり、割引率は使用見込期間に応じたリスクフリーレートを使用して資産除去債務の金額を計算しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
期首残高	140 百万円	142 百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	百万円	百万円
時の経過による調整額	2 百万円	2 百万円
資産除去債務の履行による減少額	百万円	3 百万円
期末残高	142 百万円	141 百万円

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当行グループは当行および連結子会社6社で構成され、会社ごとの財務情報を当行の取締役会に報告しており、経営資源の配分の決定および業績を評価するため、定期的に検討を行っております。

当行グループは、銀行業務を中心にリース業務等金融サービスに係る事業を行っており、「銀行業」、「リース業」を報告セグメントとしております。

「銀行業」は、預金業務、貸出業務、内国・外国為替業務等を行っており、当行および当行からの受託業務を主たる業務としている連結子会社2社を集約しております。「リース業」は、総合リース業を行っている宮銀リース株式会社であります。

2. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値であり、セグメント間の内部経常収益は、第三者間取引価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	46,178	5,598	51,777	478	52,255		52,255
セグメント間の内部経常収益	127	316	443	135	579	579	
計	46,306	5,914	52,221	614	52,835	579	52,255
セグメント利益	12,499	313	12,812	49	12,861	2	12,858
セグメント資産	2,971,947	14,946	2,986,893	8,113	2,995,007	16,410	2,978,596
その他の項目							
減価償却費	1,854	102	1,956	6	1,963		1,963
資金運用収益	33,822	2	33,824	50	33,875	41	33,834
資金調達費用	1,727	53	1,780	10	1,791	72	1,718
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,055	99	2,154	19	2,173		2,173

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、それぞれ経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の経常収益計上額との差異について記載しております。

2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、信用保証業務等を含んでおります。

3. 調整額は次のとおりであります。

(1)セグメント利益の調整額 2百万円は、セグメント間の取引消去であります。

(2)セグメント資産の調整額 16,410百万円は、セグメント間の取引消去であります。

(3)資金運用収益の調整額 41百万円は、セグメント間の取引消去であります。

(4)資金調達費用の調整額 72百万円は、セグメント間の取引消去であります。

4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	47,889	5,971	53,861	361	54,222		54,222
セグメント間の内部経常収益	919	317	1,236	127	1,363	1,363	
計	48,809	6,288	55,098	488	55,586	1,363	54,222
セグメント利益又はセグメント損失()	13,466	310	13,777	78	13,698	804	12,894
セグメント資産	2,957,199	16,548	2,973,747	6,479	2,980,226	13,681	2,966,545
その他の項目							
減価償却費	1,743	111	1,855	8	1,864		1,864
資金運用収益	34,934	1	34,935	38	34,973	838	34,135
資金調達費用	1,720	50	1,771	10	1,782	66	1,715
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,058	153	2,211	16	2,227		2,227

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、それぞれ経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の経常収益計上額との差異について記載しております。

2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、信用保証業務等を含んでおります。

3. 調整額は次のとおりであります。

(1)セグメント利益の調整額 804百万円は、セグメント間の取引消去であります。

(2)セグメント資産の調整額 13,681百万円は、セグメント間の取引消去であります。

(3)資金運用収益の調整額 838百万円は、セグメント間の取引消去であります。

(4)資金調達費用の調整額 66百万円は、セグメント間の取引消去であります。

4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. サービスごとの情報

(単位:百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	役務取引業務	リース業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	25,093	10,984	8,002	5,411	2,764	52,255

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. その他には、償却債権取立益201百万円を含んでおります。

2. 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1. サービスごとの情報

(単位:百万円)

	貸出業務	有価証券 投資業務	役務取引 業務	リース業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	25,196	12,726	8,190	5,751	2,357	54,222

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。
2. その他には、償却債権取立益141百万円を含んでおります。

2. 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	銀行業	リース業	計		
減損損失	142		142		142

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	銀行業	リース業	計		
減損損失	106		106		106

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

記載すべき重要なものはありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	8,070円00銭	8,486円39銭
1株当たり当期純利益	539円99銭	509円46銭
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	538円70銭	507円78銭

(注)1 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出してあります。

(注)2 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度末 (平成29年3月31日)	当連結会計年度末 (平成30年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	139,250	146,453
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円	315	373
うち新株予約権	百万円	136	183
うち非支配株主持分	百万円	178	190
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	138,935	146,079
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数	千株	17,216	17,213

(注)3 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	9,255	8,770
普通株主に帰属しない金額	百万円		
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	9,255	8,770
普通株式の期中平均株式数	千株	17,140	17,214
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する 当期純利益調整額	百万円		
普通株式増加数	千株	41	56
うち新株予約権	千株	41	56
希薄化効果を有しないため、潜在株式 調整後1株当たり当期純利益金額の算 定に含めなかった潜在株式の概要			

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
当行	株式会社宮崎銀行 第3回期限前償還 条項付無担保社債 (劣後特約付)	平成25年9月4日	15,000	15,000 [15,000]	(注1)	なし	平成35年9月4日
合計			15,000	15,000 [15,000]			

- (注) 1 (1)平成25年9月5日から平成30年9月4日まで 年0.88%
(2)平成30年9月4日の翌日以降 ロンドン銀行間市場における6ヵ月ユーロ円Libor + 1.89%
- 2 当期末残高欄の[]書きは1年以内に償還が予定されている金額であります。繰上償還を予定しておりません。
- 3 連結決算日後5年以内における償還予定額は以下のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
金額(百万円)	15,000				

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	110,666	112,837	0.06	
再割引手形				
借入金	110,666	112,837	0.06	平成30年5月～ 平成37年8月
1年以内に返済予定の リース債務				
リース債務(1年以内に 返済予定のものを除く。)				

- (注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。
- 2 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金 (百万円)	7,822	1,975	1,457	101,135	445
リース債務 (百万円)					

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」の内訳を記載しております。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、資産除去債務明細表の記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
経常収益(百万円)	14,101	26,510	40,243	54,222
税金等調整前四半期(当期)純利益(百万円)	4,098	5,974	10,149	12,717
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益(百万円)	2,801	4,042	6,905	8,770
1株当たり四半期(当期)純利益(円)	162.72	234.78	401.14	509.46

(注) 1 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり四半期(当期)利益は、当連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益(円)	162.72	72.06	166.36	108.31

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり四半期純利益は、当連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
現金預け金	311,105	272,900
現金	7 29,998	7 30,490
預け金	7 281,107	7 242,409
コールローン	700	1,066
買入金銭債権	133	93
金銭の信託	11,000	13,000
有価証券	1, 7, 12 769,682	1, 7, 12 688,882
国債	301,573	249,168
地方債	140,399	146,795
社債	122,149	101,283
株式	56,742	56,623
その他の証券	148,817	135,012
貸出金	2, 3, 4, 5, 8 1,846,852	2, 3, 4, 5, 8 1,934,671
割引手形	6 6,948	6 7,662
手形貸付	51,628	48,881
証書貸付	1,600,314	1,663,770
当座貸越	187,961	214,356
外国為替	2,231	2,667
外国他店預け	2,189	2,642
買入外国為替	-	0
取立外国為替	41	25
その他資産	10,848	22,617
前払費用	32	27
未収収益	2,865	2,602
金融派生商品	223	491
その他の資産	7 7,727	7 19,496
有形固定資産	9 23,735	9 23,280
建物	8,104	8,069
土地	13,791	13,695
リース資産	545	541
建設仮勘定	368	62
その他の有形固定資産	924	911
無形固定資産	2,037	2,170
ソフトウェア	1,973	2,106
その他の無形固定資産	64	64
支払承諾見返	2,433	2,894
貸倒引当金	9,225	7,907
投資損失引当金	0	0
資産の部合計	2,971,536	2,956,337

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3月31日)	当事業年度 (平成30年 3月31日)
負債の部		
預金	7 2,227,344	7 2,359,152
当座預金	50,175	50,520
普通預金	1,371,475	1,479,963
貯蓄預金	16,416	15,967
通知預金	1,069	330
定期預金	740,590	775,043
定期積金	2,240	1,896
その他の預金	45,377	35,431
譲渡性預金	174,522	133,868
コールマネー	145,574	39,561
債券貸借取引受入担保金	7 149,274	7 141,059
借入金	7 105,085	7 105,064
借入金	10 105,085	10 105,064
外国為替	12	10
売渡外国為替	10	5
未払外国為替	2	5
社債	11 15,000	11 15,000
その他負債	6,539	6,355
未決済為替借	23	15
未払法人税等	1,254	1,881
未払費用	1,133	1,050
前受収益	895	885
給付補填備金	2	1
金融派生商品	1	77
リース債務	596	551
資産除去債務	142	141
その他の負債	2,489	1,751
役員賞与引当金	40	40
退職給付引当金	3,920	4,319
睡眠預金払戻損失引当金	269	273
偶発損失引当金	102	108
繰延税金負債	1,121	775
再評価に係る繰延税金負債	2,304	2,301
支払承諾	2,433	2,894
負債の部合計	2,833,545	2,810,786
純資産の部		
資本金	14,697	14,697
資本剰余金	8,775	8,775
資本準備金	8,771	8,771
その他資本剰余金	4	4
利益剰余金	94,142	102,004
利益準備金	6,473	6,473
その他利益剰余金	87,668	95,530
別途積立金	77,401	85,201
繰越利益剰余金	10,267	10,329
自己株式	1,292	1,303
株主資本合計	116,323	124,174
その他有価証券評価差額金	18,484	18,148
土地再評価差額金	3,045	3,044
評価・換算差額等合計	21,530	21,193
新株予約権	136	183
純資産の部合計	137,990	145,550
負債及び純資産の部合計	2,971,536	2,956,337

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当事業年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
経常収益	45,888	48,416
資金運用収益	33,822	34,934
貸出金利息	25,085	25,194
有価証券利息配当金	8,624	9,626
コールローン利息	8	15
預け金利息	9	4
その他の受入利息	94	93
役務取引等収益	8,076	8,256
受入為替手数料	2,234	2,207
その他の役務収益	5,842	6,048
その他業務収益	968	1,586
国債等債券売却益	968	1,585
その他の業務収益	0	0
その他経常収益	3,021	3,639
貸倒引当金戻入益	664	1
償却債権取立益	201	141
株式等売却益	1,387	2,318
金銭の信託運用益	-	99
その他の経常収益	767	1,078
経常費用	33,502	35,066
資金調達費用	1,725	1,719
預金利息	355	304
譲渡性預金利息	123	63
コールマネー利息	148	275
債券貸借取引支払利息	369	401
借入金利息	44	43
社債利息	132	131
金利スワップ支払利息	520	470
その他の支払利息	31	29
役務取引等費用	4,350	4,455
支払為替手数料	413	413
その他の役務費用	3,937	4,042
その他業務費用	1,456	3,080
外国為替売買損	236	149
商品有価証券売買損	1	0
国債等債券売却損	1,039	2,218
国債等債券償還損	153	541
金融派生商品費用	26	170
営業経費	25,281	25,062
その他経常費用	688	747
貸出金償却	216	313
株式等売却損	104	21
株式等償却	103	239
金銭の信託運用損	75	-
その他の経常費用	190	174
経常利益	12,385	13,349
特別利益	20	370
固定資産処分益	20	366
その他の特別利益	-	3
特別損失	230	547
固定資産処分損	87	80
固定資産圧縮損	-	359
減損損失	142	106
税引前当期純利益	12,175	13,172
法人税、住民税及び事業税	3,353	3,950
法人税等調整額	611	188
法人税等合計	2,742	3,762
当期純利益	9,432	9,410

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			利益剰余金 合計
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金		
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	14,697	8,771	21	8,792	6,473	69,201	10,654	86,329
当期変動額								
剰余金の配当							1,623	1,623
別途積立金の積立						8,200	8,200	-
当期純利益							9,432	9,432
自己株式の取得								
自己株式の処分			17	17				
土地再評価差額金の取崩							3	3
株主資本以外の項目の当 期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	17	17	-	8,200	386	7,813
当期末残高	14,697	8,771	4	8,775	6,473	77,401	10,267	94,142

	株主資本		評価・換算差額等			新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証 券評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	1,694	108,125	21,776	3,049	24,825	88	133,039
当期変動額							
剰余金の配当		1,623					1,623
別途積立金の積立		-					-
当期純利益		9,432					9,432
自己株式の取得	3	3					3
自己株式の処分	405	388					388
土地再評価差額金の取崩		3					3
株主資本以外の項目の当 期変動額(純額)			3,291	3	3,295	48	3,247
当期変動額合計	401	8,197	3,291	3	3,295	48	4,950
当期末残高	1,292	116,323	18,484	3,045	21,530	136	137,990

当事業年度(自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							利益剰余金 合計
	資本金	資本剰余金			利益準備金	その他利益剰余金		
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計		別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	14,697	8,771	4	8,775	6,473	77,401	10,267	94,142
当期変動額								
剰余金の配当							1,549	1,549
別途積立金の積立						7,800	7,800	-
当期純利益							9,410	9,410
自己株式の取得								
自己株式の処分			0	0				
土地再評価差額金の取崩							0	0
株主資本以外の項目の当 期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	0	0	-	7,800	61	7,861
当期末残高	14,697	8,771	4	8,775	6,473	85,201	10,329	102,004

	株主資本		評価・換算差額等			新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証 券評価差額金	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	1,292	116,323	18,484	3,045	21,530	136	137,990
当期変動額							
剰余金の配当		1,549					1,549
別途積立金の積立							-
当期純利益		9,410					9,410
自己株式の取得	11	11					11
自己株式の処分	0	0					0
土地再評価差額金の取崩		0					0
株主資本以外の項目の当 期変動額(純額)			336	0	337	46	290
当期変動額合計	11	7,850	336	0	337	46	7,560
当期末残高	1,303	124,174	18,148	3,044	21,193	183	145,550

【注記事項】

(重要な会計方針)

- 1 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。
- 2 有価証券の評価基準及び評価方法
 - (1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
 - (2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
- 3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
- 4 固定資産の減価償却の方法
 - (1) 有形固定資産(リース資産を除く)
有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。)並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用しております。
なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	5年～50年
その他	3年～20年
 - (2) 無形固定資産(リース資産を除く)
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。
 - (3) リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
- 5 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。
- 6 引当金の計上基準
 - (1) 貸倒引当金
貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は2,018百万円(前事業年度末は1,066百万円)であります。
 - (2) 投資損失引当金
投資損失引当金は、投資に対する損失に備えるため、有価証券の発行会社の財政状態等を勘案して必要と認められる額を計上しております。
 - (3) 役員賞与引当金
役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。
 - (4) 退職給付引当金
退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用
その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理
数理計算上の差異
各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理
 - (5) 睡眠預金払戻損失引当金
睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。
 - (6) 偶発損失引当金
偶発損失引当金は、信用保証協会との責任共有制度において、信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。

7 ヘッジ会計の方法

金融資産・負債から生じる金利リスクをヘッジする目的で金利スワップ取引を利用しております。なお、金利スワップ取引で特例処理の適用要件を満たすものについては、金利スワップの特例処理を適用しております。

8 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税（以下、消費税等という。）の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

(貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
株式	3,604百万円	3,606百万円
出資金	815百万円	1,513百万円

2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
破綻先債権額	133百万円	228百万円
延滞債権額	23,653百万円	21,164百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち3ヵ月以上延滞債権額はありませぬ。

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で、破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
貸出条件緩和債権額	7,011百万円	9,918百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
合計額	30,798百万円	31,311百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
	6,948百万円	7,662百万円

7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
担保に供している資産		
預け金	40百万円	39百万円
有価証券	298,420 "	288,785 "
計	298,460 "	288,824 "
担保資産に対応する債務		
預金	9,547 "	9,585 "
債券貸借取引受入担保金	149,274 "	141,059 "
借入金	100,000 "	100,000 "

上記のほか、為替決済及びデリバティブ取引等の担保として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
現金	2,000百万円	15,851百万円
有価証券	19,216 "	3,032 "

また、その他の資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
保証金	220百万円	218百万円

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
融資未実行残高	452,815百万円	488,885百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)	448,994百万円	485,766百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
圧縮記帳額	665百万円	1,011百万円
(当該事業年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(359百万円)

10. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
劣後特約付借入金	5,000百万円	5,000百万円

11. 社債は、劣後特約付社債であります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
劣後特約付社債	15,000百万円	15,000百万円

12. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
	100百万円	280百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度(平成29年3月31日)

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式			
関連会社株式			
合計			

当事業年度(平成30年3月31日)

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式			
関連会社株式			
合計			

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額
(百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
子会社株式	3,604	3,606
関連会社株式		
合計	3,604	3,606

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	2,948 百万円	2,876 百万円
退職給付引当金	1,194	1,315
減価償却費	631	578
有価証券	977	978
退職給付信託設定額	1,824	1,851
その他	1,026	1,158
繰延税金資産小計	8,603	8,758
評価性引当額	2,050	2,001
繰延税金資産合計	6,553	6,757
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	7,663	7,502
その他	11	30
繰延税金負債合計	7,675	7,532
繰延税金資産(負債)の純額	1,121 百万円	775 百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった
主な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.69 %	30.69 %
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.15	0.19
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.61	2.51
住民税均等割等	0.24	0.27
土地再評価差額金の取崩額	0.02	0.08
評価性引当額の増減()	7.93	0.37
その他	0.04	0.21
税効果会計適用後の法人税等の負担率	22.52 %	28.56 %

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	32,360	607	< 28 > 908	32,059	23,989	583	8,069
土地	(5,350) 13,791	183	(4) < 78 > 279	(5,346) 13,695			13,695
リース資産	997	188	182	1,003	462	192	541
建設仮勘定	368	612	919	62			62
その他の 有形固定資産	7,044	576	342	7,278	6,367	286	911
有形固定資産計	(5,350) 54,563	2,169	(4) < 106 > 2,632	(5,346) 54,099	30,819	1,062	23,280
無形固定資産							
ソフトウェア	11,013	782		11,795	9,688	648	2,106
その他の 無形固定資産	180			180	116	0	64
無形固定資産計	11,193	782		11,976	9,805	649	2,170

(注) 1 土地及び有形固定資産計の当期首残高、当期減少額及び当期末残高欄における()内は、土地の再評価に関する法律(平成10年法律第34号)により行った土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。

2 当期減少額欄における< >内は減損損失の計上額<内書き>であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金					
一般貸倒引当金	1,327	1,252		1,327	1,252
個別貸倒引当金	7,898	6,654	1,316	6,581	6,654
うち非居住者向け債権分					
特定海外債権引当勘定					
投資損失引当金	0	0		0	0
役員賞与引当金	40	40	40		40
睡眠預金払戻損失引当金	269	273	98	170	273
偶発損失引当金	102	108	22	79	108
計	9,636	8,329	1,477	8,159	8,329

(注) 当期減少額(その他)欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

一般貸倒引当金・・・・・・洗替による取崩額
個別貸倒引当金・・・・・・洗替による取崩額
投資損失引当金・・・・・・洗替による取崩額
睡眠預金払戻損失引当金・・・・洗替による取崩額
偶発損失引当金・・・・・・洗替による取崩額

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	1,254	1,881	1,254		1,881
未払法人税等	1,136	1,637	1,136		1,637
未払事業税	118	244	118		244

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当ありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・ 売渡し 取扱場所 株主名簿管理人 買取り・売渡し 手数料	(特別口座) 福岡市中央区天神二丁目14番2号 日本証券代行株式会社 福岡支店 (特別口座) 東京都中央区日本橋茅場町一丁目2番4号 日本証券代行株式会社 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当銀行の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によつて電子公告による公告をすることができない場合は、宮崎日日新聞及び日本経済新聞に掲載して行ふ。 (当行ホームページアドレス http://www.miyagin.co.jp/)
株主に対する特典	ありません。

(注) 1 株式等の取引に係る決済の合理化を図るための社債等の振替に関する法律等の一部を改正する法律(平成16年法律第88号)の施行に伴い、単元未満株式の買取り・売渡しを含む株式の取扱いは、原則として証券会社等の口座管理機関を経由して行うこととなっています。但し、特別口座に記録されている株式については、特別口座の口座管理機関である日本証券代行株式会社が直接取扱います。

2 平成29年10月1日付で1,000株を100株とする単元株式数の変更を実施いたしました。

3 当行の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

(1)会社法第189条第2項各号に掲げる権利

(2)会社法第166条第1項の規定による請求をする権利

(3)株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

(4)株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当行には、親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第132期(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
平成29年6月27日 関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

事業年度 第132期(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
平成29年6月27日 関東財務局長に提出

(3) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

平成29年6月29日 関東財務局長に提出

(4) 四半期報告書及び確認書

第133期第1四半期(自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日)
平成29年8月10日 関東財務局長に提出

第133期第2四半期(自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日)
平成29年11月24日 関東財務局長に提出

第133期第3四半期(自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日)
平成30年2月13日 関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月26日

株式会社 宮 崎 銀 行
取 締 役 会 御 中

有限責任監査法人 トー マ ツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 宮 本 芳 樹

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 只 隈 洋 一

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 城 戸 昭 博

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社宮崎銀行の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社宮崎銀行及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社宮崎銀行の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社宮崎銀行が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- () 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月26日

株式会社 宮 崎 銀 行
取 締 役 会 御 中

有限責任監査法人 ト - マ ツ

指定有限責任社員	公認会計士 宮 本 芳 樹
業務執行社員	
指定有限責任社員	公認会計士 只 隈 洋 一
業務執行社員	
指定有限責任社員	公認会計士 城 戸 昭 博
業務執行社員	

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社宮崎銀行の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第133期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社宮崎銀行の平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- () 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。